

「共生と自立」の視点に立った 生き方探究教育のさらなる充実を求めて

－ 「自己理解能力・将来設計能力」を育てる指導の実際－

文部科学省は、「キャリア教育推進の手引」の中で、「精神的・社会的自立が遅れ、自己肯定感をもてない、進路を選ぼうとしない等々といった子どもたちが増えつつある」との課題を指摘している。これらを受け、本市では、地域・社会とのかかわりの中で生き方を考え、生きる力をはぐくむ「京都市キャリア教育スタンダード『生き方探究教育』」の取組がすすめられてきた。

生き方探究教育を充実させることは、「夢や願いを叶えたい」という子どもたちの思いを実現させることにつながる。これは、「多くの人とのかかわりの中で、希望やあこがれをもって輝き続け、幸せな将来をつかんでほしい」という、家庭・地域・社会の大人たちの願いにもつながる。したがって、生き方探究教育をさらに推進する必要がある。

本研究では、「自己の夢をつくりあげる力（自己理解能力・将来設計能力）」に焦点を当て、第2学年生活科、第4学年道徳および特別活動、第6学年総合的な学習の時間の実践授業を通して検討した上で、具体的な指導の在り方を提示した。

目 次

はじめに	1	第3章 小学校での実践授業を通して	
第1章 「共生と自立」の視点に立った 生き方探究教育		第1節 第2学年「生活科」 ～自分のめあてをもち、計画を立てる ことの大切さがわかる取組～	
第1節 「『生き方探究教育』キャリア教育 京都市スタンダード」が示すもの		(1) 実践授業での工夫	17
(1) 生き方探究教育とは	1	(2) 子どもの姿から	18
(2) 生き方探究教育の現状	3	第2節 第4学年「道徳」「特別活動」 ～働くことや目標・希望をもつことの 大切さについて考える取組～	
第2節 小学校における生き方探究教育		(1) 実践授業での工夫	20
(1) 小学校段階における「つきたい力」	7	(2) 子どもの姿から	22
(2) 生き方探究教育にかかわる教育活動	8	第3節 第6学年「総合的な学習の時間」 ～夢の実現のために計画を立て、 将来について語り合う取組～	
第2章 「自己理解能力・将来設計能力」 を育てる教育活動		(1) 実践授業での工夫	26
第1節 「自己の夢をつくりあげる力」に 視点をおいた授業改善		(2) 子どもの姿から	27
(1) 「自己の夢をつくりあげる力」とは	10	第4章 生き方探究教育の さらなる充実を求めて	
(2) 学習指導案・学習活動案の工夫	12	第1節 研究の成果と課題	
第2節 一人一人を大切にしたい 個に対する働きかけ		(1) 各教科等における授業改善	31
(1) キャリア発達を支援する相談活動	14	(2) 全教育活動での個に対する働きかけ	32
(2) 次時や将来に生かす評価活動	15	第2節 今後の取組に向けて	
		(1) 発達段階に応じた系統的な取組	33
		(2) 滑らかな接続をめざした 各校種間の連携	34
		おわりに	34
		付表	35

<研究担当> 河野 由佳 (京都市総合教育センター研究課研究員)

<研究協力校> 京都市立竹田小学校
京都市立西陣中央小学校
京都市立南大内小学校

<研究協力員> 井上 拓哉 (京都市立竹田小学校教諭)
富森 雅子 (京都市立西陣中央小学校教諭)
荒川 奈津子 (京都市立西陣中央小学校教諭)
重村 亜紀子 (京都市立西陣中央小学校教諭)
上田 雅也 (京都市立南大内小学校教諭)

はじめに

子どもは、「こんな人になりたい」「こういう自分でありたい」といった将来の自分を描くことで、自己実現の願望や目標となるものが見えてくる。目標があるということは、それに向かって進む中で充実感を生み出す。多くの人とかかわりながら、小さな成功体験を重ねることで、自分に対する自信が生まれる。そしてまた、自分を見つめ、新たな将来像を描き、成長していく。

各教科等の枠を超えて、人権教育・安全教育・環境教育などのすべての教育活動を束ね、生き方を考え、生きる力をはぐくむ教育。この「生き方探究教育」を実践することにより、子どもたちは将来の自分に思いを馳せ、今を精一杯生きようとするのではないだろうか。そして、そのような子どもたちを育てることが、私たち大人の役割だと考える。

生き方探究教育をいかに教育実践につなげていくのか。それによって、子どもたちはどのように変わるのか。生き方探究教育にかかわる教育活動のさらなる充実を図りたい。

本研究では、「自己の夢をつくりあげる力（自己理解能力・将来設計能力）」に焦点を当て、各教科等の実践授業を通して検討した上で、具体的な指導の在り方を提示した。

第1章 「共生と自立」の視点に立った 生き方探究教育

第1節 「『生き方探究教育』キャリア教育 京都市スタンダード」が示すもの

(1) 生き方探究教育とは

今日、子どもたちの進路をめぐる環境は大きく変動し、ニート・フリーター・早期離職者などの増加が社会問題化している。2007年度版「労働経済白書」は、「15歳から34歳までのニートは62万人で緩やかな減少傾向にあるが、労働人口に占める割合は1.9%にもものぼり、25歳未満の若年層のニート数は増えている。また、フリーターについては、全体を見ると減少傾向にあるものの、25歳以上の無業者が増えている」(1)と指摘している。また、「年齢が高いフリーター層が固定化されれば、少子化の進行や社会的負担の増大などが現実になりかねない」(2)と、厚生労働省は同白書内で警告している。

年齢的には十分大人になり、社会に出て、精神的にも経済的にも自立していかなければならない若者たちが、どう生きていけばいいのか、今何をすべきなのかを考えることができずにいる状況が、これらのことからうかがえる。

このような状況は、若者の精神的・社会的な自立の遅れからくる問題だけではない。最近の子どもは、自分の成績や性格、そして今日の日本社会に対して不満を抱いているということが、Benesse教育研究開発センターの調査で浮き彫りになっている。それによると、「自分の性格に満足しているか」という問いに対して、「とても満足」「まあ満足」と回答した子どもの割合は、小学校で47.8%、中学校で34.8%と、ともに5割を超えていないことが報告されている。(3)この結果に対し、同センターは「自分に対して満足感がもてないということは、自分について『自信』がないということだ。『自信』の基盤には『自尊感情』『自己肯定感』などがありますが、それがもてないまま成長すると、何事にも『やればできる』という気持ちになれずに、つい消極的になるおそれがあります」(4)と指摘している。

このような背景の中で、文部科学省は、「キャリア教育推進の手引」(以下、「推進の手引」とする)において、「子どもたちが『生きる力』を身に付け、社会の激しい変化に流されることなく、それぞれが直面するであろう様々な課題に柔軟にかつたくましく対応し、社会人・職業人として自立していくことができるようにする教育の推進が強く求められている」(5)と、キャリア教育の必要性を唱えた。

ここで、キャリア教育の定義について整理しておくことにする。「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」(以下、「協力者会議報告書」とする)では、キャリアを「個々人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖」とした上で、キャリア教育を次のように定義している。(6)

「児童生徒一人一人のキャリア発達※1を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」
端的には、「児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てる教育」

服部は、キャリア教育を「社会の変化に対応して、学び続け、働き続ける意欲と能力を持った人間を育てる教育。子どもの社会的自立の基礎を培うための教育活動である」(7)としている。社会的

に自立する力を育てなければならないとする考えは、「キャリア教育は、社会の中で自立的にいきいきと生きていく力を育てることを目指す教育」(8)と述べている渡辺も同様である。また、「いつか成人して責任感を持って社会に出る段階に達したとき、一人の社会人として、精神的、情緒的、社会的に自立し、その結果として経済的自立ができる子どもを育てること」(9)がキャリア教育のめざすことであるとも、渡辺は記している。

これらのことから、今、キャリア教育で求められていることは、子どもが将来、社会人・職業人として自立していくために必要な、「学ぶこと」「働くこと」の意欲・態度と能力を養うことであると考えられる。

また、巻野は、「『キャリア教育』は、個に応じた指導を徹底し、自己の生き方を考え、共に学び高め合い、自己実現を目指す教育と考える。人として『生きる』ことや『働く』ことを、どのように考え、どう意味づけていくのか、自己の生き方や自らの将来を見通す中で考えさせ、勤労観・職業観を育てる教育と言える」(10)と述べている。

キャリア教育では、一人一人の子どもを徹底的に大切に、「自立的に生きていく」力とともに、「社会の中で共に生きていく」力をはぐくむことも大切になってくるととらえている。

これらのことから、キャリア教育では、自立的に生きる力を育てるだけでなく、地域・社会の様々な人とかわりながら、人間関係の基礎や社会的ルールを学び、子どもたちがたくましく生きていく力をはぐくむことが求められていると考える。

本市では、キャリア教育を「生き方探究教育」として進めている。平成18年2月に『キャリア教育京都市スタンダード〈試案〉』(11) (以下、〈試案〉とする)が出され、「地域・社会とのかかわりの中で生き方を考え、生きる力をはぐくむ」生き方探究教育の取組が始まった。平成20年4月には『キャリア教育京都市スタンダード〈概要編〉』(12) (以下、〈概要編〉とする)、『キャリア教育京都市スタンダード〈実践事例編〉』(13) (以下、〈実践事例編〉とする)が出され、実践が広がりつつある。

〈概要編〉には、「社会の中で生きることは『はたらくこと』である」とした上で、生き方探究教育を次のように定義している。(14)

生き方探究教育とは、「生きる力」をどのように社会に役立てるのかという自らの生き方を確立する教育である。

このことは、今まで学んで得た知識や技能などを、自分の将来にどう生かしていくのかという自己実現に向けた教育であると解釈できる。

また、本市教育委員会は、「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について」で示されている「キャリア教育における職業的(進路)発達にかかわる諸能力」(表1-1)(15)を改編し、生き方探究教育で子どもにつけたい力である、「5つの領域と17の力」(以下、「5領域17の力」とする)(表1-2)(16)を例示した。

表1-1 キャリア教育における

職業的(進路)発達にかかわる諸能力
(国立教育政策研究所生徒指導研究センター作成)

人間関係形成能力	自他の理解能力
	コミュニケーション能力
情報活用能力	情報収集・探索能力
	職業理解能力
将来設計能力	役割把握・認識能力
	計画実行能力
意思決定能力	選択能力
	課題解決能力

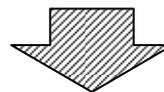


表1-2 「生き方探究教育」における5つの領域と17の力
(京都市教育委員会作成)

共生	(1)人と共に生きる力 (人間関係形成能力)	①自分と他者を理解する力
		②コミュニケーションを豊かにする力
		③世界に視野を広げる力
	(2)社会で共に生きる力 (社会参画能力)	④地域と共に生きる力
		⑤集団に適応し共に生きる力
		⑥家族と共に生きる力
(3)よりよく判断する力 (意志決定能力)	⑦自らの意志と責任で判断する力	
	⑧自らが考え選択する力	
	⑨自らの課題を見つけ解決する力	
自立	(4)情報を集め活用する力 (情報活用能力)	⑩情報を収集し探索する力
		⑪職業について理解する力
		⑫情報技術を活用する力
	(5)自己の夢をつくりあげる力 (自己理解・将来設計能力)	⑬自分の社会的役割を認識する力
		⑭計画を企画し実行する力
⑮心理的な自己自立を図る力		
⑯社会的な自己自立を図る力		
		⑰意欲的に学ぼうとする力

これは、人間はお互いに支え合って生きているという自覚や、社会における自らの責務を認識するという『共生』の観点と、個としての自己の有り様を認識し、社会とかかわりながら主体的に生きるという『自立』の観点を二つの柱として設定している。

これらのことを受け、どのような自分になりたいのか、どのような将来の進路や未来を選択すればいいのか、そのためには、今、何を学ぶべきなのかを考えることができる力を育てることが、生き方探究教育を進める上で大切なことであると筆者は考える。また、子どもたちが自分の今ある姿を見つめ、友だちや家族、地域社会の人たちとのかわりの中で学び合うことが大切になってくると思われる。

子どもは、自分の歩いてきたあしあとを確かめながら、成長を喜び、自己改善を繰り返す。自分の真の姿を探り、見極め、自分の次の目標（夢やあこがれ）に向かって一生懸命努力し続ける。このような子どもを育てる生き方探究教育を推進していくために、指導者は、こうした教育を、「職業に関する技能や知識の習得」「卒業後の進学指導・就職指導」といった意味だけでとらえてはならない。なぜなら、それらは、この教育がめざすところの一部分だからである。「働くことで自分は何かを実現したいのか」「社会の中でよりよく生きていくためにはどうすればいいのか」といった、より広い意味でとらえることが必要である。

「生き方探究教育」を進めるに当たっては、各教科等の枠を超えて、子どもたちが、今の自分はどうのような自分なのかといった自己の「在り方」を見つめ、将来どのような自分になりたいのかといった自己の「生き方」を考えながら、よりよい自己実現をめざすのだということを、指導者は忘れてはならないと考える。

※1 発達とは生涯にわたる変化の過程であり、人が環境に適応する能力を獲得していくことである。その中で、キャリア発達とは、自己の知的、身体的、情緒的、社会的な特徴を一人一人の生き方として統合していく過程である。

(文部科学省「キャリア教育推進の手引」2006.1 p.3より抜粋)

(2) 生き方探究教育の現状

(試案)でも示されているように、生き方探究教育は「学校におけるすべての教育活動を通じて行われるものであり、全教科・領域等において、子どもの発達段階に応じた内容を計画的・系統的に実施するもの」(17)である。また、〈概要編〉に

は、生き方探究教育を実施する際、「子どもたちのキャリア発達を支援する観点に立って、各教科・領域、総合的な学習の時間などあらゆる教育活動を体系化し、意図的・計画的・組織的に実施することができるように、各校種連携のもと、教育課程編成の在り方を見直し、創意工夫ある教育活動を展開しなければならない」(18)とある。

本市では、小・中学校段階から、子どもたちに勤労観・職業観をはぐくむ「キャリア教育」などの推進を図るため、「スチューデントシティ(小学生対象)・ファイナンスパーク(中学生対象)学習」を実施している。これらは、産学公連携の下、平成14年に設立した「21世紀型教育コンテンツ開発委員会」の事業の一環として取り込まれたものである。実施(平成18年度より施行)するに当たっては、世界最大の経済教育団体であるジュニア・アチーブメント※2の教育プログラム・教材などを活用し、京都市ならではの伝統文化や産業などの視点を盛り込んだ独自のプログラム開発を行っている。子どもの教育の充実はもとより、京都市全体の経済の活性化につながるよう、全市を挙げて取組を推進しているものである。

スチューデントシティ学習のねらいは、「日常生活にかかわる社会のしくみや経済の働きを理解させる」「望ましい勤労観・職業観を育て、自らの生き方を考える力を育成する」の2点である。プログラムは、「事前学習」「体験学習」「事後学習」で構成されている。事前学習(10時間)および事後学習(2時間)は各学校で担任の指導により行われ、体験学習は“京都市スチューデントシティ”において6時間行われる。

“京都市スチューデントシティ”は、「京都まなびの街 生き方探究館(元京都市立滋野中学校)」の3階部分に再現された「街」で、12の『ブース』(銀行、家庭電化製品、伝統産業、新聞社、京つけもの、京銘菓、区役所、プリントサービス、通信・電話、警備会社、コンビニエンスストア、航空会社)と『広場』で構成されている。子どもたちはここで、住民としての消費者役と、役所・企業に勤める労働者役とを両方体験し、社会のしくみや経済の働き、社会と自分とのかかわりなどを学習する。

第5学年の総合的な学習の時間などにおいて試行実施されてきたスチューデントシティ学習が、平成20年度より、本市の全小学校で実施されることとなった。スチューデントシティ学習は、生き方探究教育の柱となる学習内容であり、子ど

もたちに働くことの意味や生きることの尊さを考えさせる上で、非常に有効な学習であると考えます。

この学習が、生き方探究教育の浸透と推進に果たした役割は大きい。しかし、スチューデントシティ学習の認知度や生き方探究教育についての理解に関しては、まだ十分であるといえない点がある。それは、スチューデントシティ学習を行ったから生き方探究教育ができたという誤解が一部にあるのではないかと危惧するからである。

では、本市の生き方探究教育に対する理解はどのような現状なのだろうか。研究協力校3校の教員47名を対象に、「生き方探究教育」に対する理解および実施内容に関する意識調査を行った。調査人数が少ないので、一概に断言することはできないが、研究協力校における教員の意識の傾向から、現状を推測することはできると思われる。

《「生き方探究教育」に関する教員アンケート》

本アンケートは、生き方探究教育について「周知」「実施時期」「重視したい内容」「研修の有無」「実践の有無」「児童につけたい力」の6つの項目に分け、それぞれの項目ごとに質問を提示し、回答を求めた。そのうち、特徴的な結果が表れた3つの項目について取り上げ、報告する。

(a) 「生き方探究教育の周知」について

(a)の質問項目について、教職経験年数別の回答人数をグラフ化したものを、図1-1に示した。

「生き方探究教育」の内容について、知っていますか。

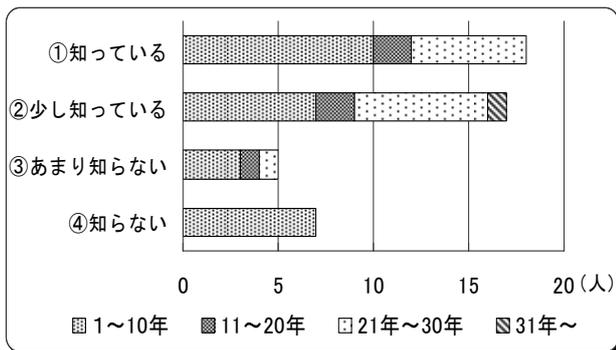


図1-1 生き方探究教育の周知について

教員の生き方探究教育の周知に関する意識としては、「知っている」と回答した人数が最も多い。また、ほぼ同数が「少し知っている」と回答している。ところが、約1/4の教員が、「知らない」「あまり知らない」と回答している。

教職経験年数別では、教職経験11年以上の教員に着目すると、20人中18人が「知っている」「少し

知っている」と回答している。特に、「知らない」と回答した教員に注目すると、すべて教職経験10年以下の教員であった。

平成17年度に、「小・中学生の勤労観・職業観を含む生き方についての意識調査」が本市において実施されている。教職員の意識調査(小学校316名,中学校163名から回答)の結果によると、「小学校の教職員では、55%が、キャリア教育について『あまり知らない』『知らない』と回答している」「小学校の教職員では、キャリア教育の推進が進められていることを『知っている』『少し知っている』の割合が半数程度であった」(19)とある。3年前のこの調査を参考にすると、研究協力校の教職員の認知度は比較的高い傾向にあるが、まだ十分ではないと考えられる。

これらのことから、生き方探究教育の認知の度合いは高くなってきているものの、すべての教員が理解していると言いきれない現状であることがわかった。また、教職経験年数が浅い教員の中に、生き方探究教育の認知が十分とはいえない教員が多いことが明らかになった。

生き方探究教育は、すべての教育活動を通して進めるものであることから、全教職員が目標を共有し、様々な機会において、適切、かつ効果的な支援を機能的に行えるようにすることが大切である。生き方探究教育の周知を図るためには、研修の機会をさらに設けたり、授業研究を進めたりすることが、取組の充実につながると考える。

(b) 「生き方探究教育を意識した実践の有無」について

(b)の質問項目について、教職経験年数別の回答人数をグラフ化したものを、図1-2に示した。

教育課程の中で、「生き方探究教育」を意識した実践をしたことがありますか。

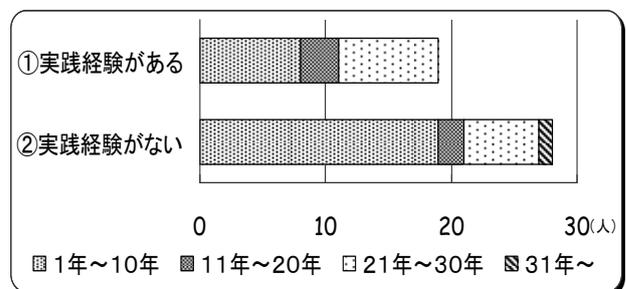


図1-2 生き方探究教育を意識した実践の有無について

生き方探究教育の実践については、約60%の教員が行ったことがないと回答している。教職経験

が10年以下の教員に着目してみると、約70%の教員は実施経験がないと回答している。

平成17年度に行われた本市の意識調査においても、「教職員の多くはキャリア教育の必要性は感じているが、(中略)何をどう取り組めばよいかかわからないという現状がうかがえた」(20)との課題が挙げられていた。その後、様々な取組が行われてきたが、3年経過した今も、半数以上は「実践経験がない」と回答している現状がある。経験年数が11年以上の教員は、実践経験のある割合が5割以上という結果であった。とりわけ、教職経験年数の浅い教員において、「実践経験がない」と回答した割合の方が高いということに着目しておきたい。

また、全国でキャリア教育に関して先進的な取組を進めている研究に目を向けると、以下のような課題を提示している。

千葉県教育センターでは、平成16年度に小学校教員84名を対象にキャリア教育に関するアンケートによる調査を実施している。これによると、「今までに教育課程の中でキャリア教育を実践したことがありますか」の問いに対して、「実践したことがある」との回答は10.7%であり、中学校55.5%、高等学校100%と比べると、小学校の実践は極端に低いことがわかる。この結果を受け、同センターは、「小学校での実践を推進する必要がある」と指摘している。(21)

愛知県総合教育センターは、平成18年度に小学校24校を対象にキャリア教育に関するアンケートによる調査を実施している。これによると、「キャリア教育を実施している」と回答した学校は58.3%であった。同センターは、「教科指導の中での取組はまだ少なく、意識も低い状況にある」と指摘している。(22)

このように、本市だけでなく全国的に見ても、実践に関する同様の課題を指摘している。

また、今回のアンケートによる調査で、「実践を行ったことがある」と回答した具体的な実施時間は、総合的な学習の時間(スチューデントシティ学習を含む)が圧倒的に多く、実施経験者19人中、13人がこの時間に実施したと回答している。続いて社会・道徳の3人、国語・生活・特別活動の2人、音楽・家庭・体育の1人の回答となった。このことから、教科指導の中で、生き方探究教育を意識した実践を進める必要があると思われる。

今後の生き方探究教育の推進を考えたとき、生き方探究教育の指導計画を提示するとともに、よ

り多くの「実践」モデルを提示することが必要になる。特に、これまで実践経験がない教員に対しては、指導計画を示すだけでなく、示された指導計画に基づいた授業実践やワークシートなどの指導資料を、具体的に提示することが必要になるだろう。

また、「生き方探究教育の視点」を明確にし、どのような視点で指導計画を構築し、授業を展開したのかを、学習指導案(活動案)に示すことが重要になると考える。

(c) 「生き方探究教育で児童につけたい力」について

(c)の質問項目について、教職経験年数別の回答人数をグラフ化したものを、図1-3に示した。質問項目については、前述(1)で示した「生き方探究教育で子どもにつけたい力」(表1-2)である5つの領域を取り上げた。

5つのつけたい力のうち、『共生』の観点でとらえた力は、「①人と共に生きる力」「②社会で共に生きる力」「③よりよく判断する力」である。また、『自立』の観点でとらえた力は、「③よりよく判断する力」「④情報を集め活用する力」「⑤自己の夢をつくりあげる力」である。

今、子どもたちに何が一番必要だとお考えですか。

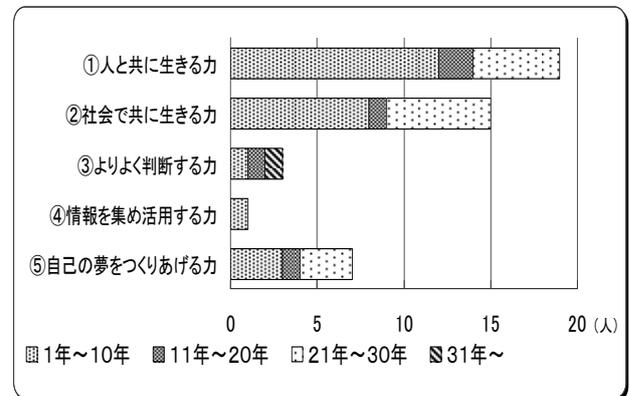


図1-3 生き方探究教育で児童につけたい力

生き方探究教育で「児童につけたい力」に関する意識としては、「人と共に生きる力」「社会で共に生きる力」と回答した教員が多い。この二つを合わせると、調査人数の7割を超える。

これらのことから、生き方探究教育において児童につけたい力は、「共に生きる力」をキーワードとしてとらえている傾向がうかがえる。人はお互いに支え合って生きているという自覚や、社会における自らの責務を認識し、生き方を探究していくという『共生』の観点は、『自立』と並ぶ生き方

探究教育の柱の一つでもあることから、この意識が高いことは望ましい姿としてとらえられる。

一方、『自立』の観点でつけたい3つの力に着目すると、「情報を集め活用する力」が必要だと回答した教員は1人、「よりよく判断する力」は3人であった。また、「自己の夢をつくりあげる力」については7人で、割合からいうと、調査人数の1割を少し超える程度である。選択肢からの回答を1つに限定したこともあり、断定することはできないが、これらのことから、もう一つの柱である『自立』の観点については、『共生』の観点ほどにはとらえられていないことがわかる。

このことから、個として自己の在り方を認識し、社会とかかわりながら主体的に自己の生き方を探究するという『自立』の観点に対する価値や重要性について、今一度、指導者側の認識を深める手だてを講じることが必要だと思われる。そこで、なぜこのような傾向が見られたのか、分析結果の数値に表れた背景について考えてみることにする。

まず、「情報を集め、活用する力」については、各教科等の授業に関連づけて情報教育に取り組むことに加えて、第1学年から、情報モラルに関する学習なども、学級活動や総合的な学習の時間に位置づけて取組がなされている。そのため、生き方探究教育と重ねてとらえられていない傾向があったのではないかと推察される。

また、「よりよく判断する力」については、教育活動の様々な学習場面で必要となる力であることから、生き方探究教育で取り上げる力と重ね、関連づけてとらえられてこなかったのではないかと推察される。

では、「自己の夢をつくりあげる力」についてはどうだろうか。

「自己の夢」という言葉から、就きたい仕事を選択し、決定させるといった職業教育を想起し、小学生にはまだ必要ではないといった考えがあったのではないかと推察される。また筆者の経験から、お互いの将来の夢を語り合うことはとても大切なことだとわかっているが、その夢の実現のためにどうしたらいいのか、今何をすべきなのかといったことを考える活動を、学習時間の中に十分取り入れることができなかった。具体的に、どのような学習展開をすれば「自己の夢をつくりあげる力」がついたといえるのかわかりにくいといったことも、教員の十分な認識につながらなかった原因だと考えられる。

自分の在り方を見つめながら、将来の夢や目標を抱き、その実現に向けて主体的に行動できる子どもを育てることは、生き方探究教育を進める上でとても重要なことである。誰かの指示がないと動けない子、目標を設定せず、言われたことや与えられた課題を単にこなしている子がいる。その子どもたちには、自分の特性を知り、常に自分もっている資質や能力を高め、夢や目標に向かって努力することができるような支援が必要である。そのことにより、個人においても、また、学級集団などの場においても、「学ぶ意欲」が向上する。「自己の夢をつくりあげる力」について、さらに教員の意識を高めることは、子どもの「学ぶ意欲」も高めることにつながると筆者は考える。

このように、教員を対象にしたアンケートによる意識調査の結果などから、生き方探究教育を推進していく上で留意したい方向性が見えてきた。

1点目は、「**生き方探究教育の意義やねらいを、『現在の教育活動の意義やねらいの中でとらえる』ことを共通理解する**」ということである。

三村は、「小学校におけるキャリア教育の取り組みについて絶対的に情報量が不足しているようである」(23)と述べている。また、文部科学省の「推進の手引」は、「キャリア教育の必要性は理解されながらも、各学校の現状を見ると、その意味付けや受け止め方は多様である」(24)と指摘している。「キャリア教育は、高学歴エリートを育てようとする教育なのではないか」「幼い時期に職業選択をさせるのは、無理があるのではないか」といった誤解が一部にはあるのではないだろうか。

今回の調査結果も踏まえると、生き方探究教育を実施する時期、重要視したい指導内容についてもとらえ方が多様である。生き方探究教育の意義を理解するための研修の充実や、校内委員会などの組織体制作りの推進が求められる。

2点目は、「**生き方探究教育の視点を教育課程に生かせるようにする**」ということである。生き方探究教育に関する研修については、今回の調査によると、約2/3の教員が参加し、経験している。にもかかわらず、生き方探究教育の視点を意識した教育活動が、十分に展開されていないという現状が明らかになった。「ねらいや必要性はわかるが、各教科等の授業の中でどのようにそれらを取り入れていけばいいのかわからない。」「提示されている具体例・指導例が少ない。」「魅力を感じるが、負担にも感じる。」といった教員の声もアンケートの自由記述欄からうかがえた。

そこで、総合的な学習の時間に限らず、各教科・領域等といったすべての教育課程において、生き方探究教育の視点を生かした教育活動を、意図的・計画的に実施していくことが必要であると思われる。

3点目は、「**自己の夢をつくりあげる力(自己理解能力・将来設計能力)**については、『**共生と自立**』の観点に立ち、**子どもを育成することができるようにする**」ということである。調査結果からは、『**共生**』に重きをおいた生き方探究教育にかかわる取組が進められてきた傾向がうかがえた。

しかし、文部科学省は、「精神的・社会的自立が遅れ、自己肯定感を持ってない、将来に希望を持つことができない、進路を選ぼうとしない等々といった子どもたちが増えつつある」(25)ことを指摘している。また、内藤は、「日本の子どもは他の国の子どもと比較して将来への志望が低く、未来に対する見通しの暗さ、やる気のなさへとつながっていくのではないだろうか」(26)と、日本の子どもたちの将来展望を危惧している。

これらのことから、子どもたちの「自己理解能力・将来設計能力」を育てることが必要なのだということを、教員がさらに意識して、教育活動に取り組まなければならないと考える。先ほども述べたように、自分を見つめ、夢や目標の実現に向けて主体的に行動できるようになると、「学ぶ意欲」が高まる。子どもたちが「自分の今の姿(特性)」を知り、「なりたい自分像」を思い描き、その夢や目標に向かって努力することが大切だと考えるからである。

今後は、人や社会とのつながりを大切にすると**『共生』の観点と、積極的・主体的に生きる**といった『**自立**』の観点とを偏りなく意識し、子どもにつけたい力である「**自己の夢をつくりあげる力**」について重視した実践を進めることが必要であると考えられる。

※2 ジュニア・アチーブメント Junior Achievement

ジュニア・アチーブメント(本部 アメリカ)は、1919年に米国で発足した世界最大の経済教育団体で、民間・非営利の活動は現在、世界97カ国に広がりを見せ、4万社の企業支援を受けて青少年の社会的適応力の育成を目的とした教材や指導法の開発を行い、教材を無償で教育機関に提供している。

日本においては1995年に日本アイ・ビー・エムの椎名武雄会長(現 相談役)を理事長に、ジュニア・アチーブメント日本が設立された。学習プログラムには「体験型実技演習プログラム」「コンピュータ・シミュレーション」「セミナー・講習会」等があり、スチューデントシティとファイナンスパークは「体験型実技演習プログラム」の一つである。

第2節 小学校における生き方探究教育

(1) 小学校段階における「つけたい力」

「キャリア教育」という言葉が文部科学行政関連の報告などで初めて紹介されたのは、平成11年12月の中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」においてである。その中で、学校教育と職業生活との接続の課題を挙げ、「学校と社会及び学校間の円滑を図るためのキャリア教育(望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身に付けさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育)を小学校段階から発達段階に応じて実施する必要がある」(27)と、キャリア教育の実施時期について、具体的に提言した。

また、〈概要編〉は、生き方探究教育をすすめるに当たって、「小学校からの各発達段階における指導のあり方を小・中・高の教育課程全体を見直す中で確立しなければならない」(28)と明記している。

これらのことから、小学校低学年からの勤労観・職業観をはぐくむ教育とともに、自分の生き方と向き合うことができる教育活動が求められているということがわかる。近年の社会・生活環境の急激な変化は、子どもたちの社会的発達に及ぼす影響が極めて大きい。これを踏まえて考えると、学校生活から卒業後の社会での職業生活への接続・移行を滑らかに行うためには、小学校段階から徐々に長い時間をかけて、勤労観・職業観をはぐくむ経験や、自分の生き方と向き合う経験を積み重ねていく必要がある。

ところが、研究協力校で行った意識調査の結果を見ると、教員の生き方探究教育の実施時期に関する意識としては、「小学校高学年から始めるのが適切である」と回答した教員が約半数で最も多かった。また、「中学校から始めるのが適切である」と回答した教員が約3割であった。一方、「小学校低学年から始めるのが適切である」と回答した教員は47人中2人しかいなかった。

また、自由記述欄には、「小学生に生き方探究教育は早すぎるのではないか。」「発達段階を考えると、低学年の子どもが勤労観・職業観を理解するのは難しいのではないか。」ということが記されていた。

このことに対し、筆者は、子どものキャリア発達を考えるからこそ、小学校段階から生き方探究教育の視点に立った取組が必要であると考えられる。

表1-3は、国立教育政策研究所生徒指導研究センターの示した、学校段階別に見た職業的（進路）発達段階、職業的（進路）発達課題(29)である。

表1-3 学校段階別に見た職業的（進路）発達段階、
職業的（進路）発達課題
(国立教育政策研究所生徒指導研究センター作成)

小学校段階	中学校段階	高等学校段階
〈職業的（進路）発達段階〉		
進路の探索・選択にかかる基盤形成の時期	現実的探索と暫定的選択の時期	現実的探索・試行と社会的移行準備の時期
〈職業的（進路）発達課題〉		
○自己及び他者への積極的関心の形成・発展 ○身のまわりの仕事や環境への関心・意欲の向上 ○夢や希望、憧れる自己イメージの獲得 ○勤労を重んじ目標に向かって努力する態度の育成	○肯定的自己理解と自己有用感の獲得 ○興味・関心等に基づく勤労観、職業観の形成 ○進路計画の立案と暫定的選択 ○生き方や進路に関する現実的探索	○自己理解の深化と自己受容 ○選択基準としての勤労観、職業観の確立 ○将来設計の立案と社会的移行の準備 ○進路の現実吟味と試行的参加

この表では、小学校の発達段階は、「進路の探索・選択にかかる基盤形成の時期」と位置づけられている。自己や他者、身の回りの仕事や環境に関心をもつこと、そして夢や憧れのイメージをふくらませ、その目標に向かって努力する態度を養うことが、小学校段階の発達課題であるととらえると、この時期は、勤労観・職業観や自立的に生きる力の基礎的な資質や能力、態度を形成することにおいて大切な時期だと考える。

また、「推進の手引」は、小学校におけるキャリア教育について、「特に小学校は、低学年・中学年・高学年と成長が著しく、社会的自立・職業的自立に向けて、その基盤を形成する重要な時期である」(30)と述べている。

小学校段階でめざしているものは、仕事に役立つ技術を身につけさせる職業教育や、個別の進学・進路選択の支援ではない。自分や他者、社会や環境に関心をもつことや、夢をもち、それを叶えるために、将来必要となるコミュニケーション能力や情報収集力、計画実行力などの基礎的能力をはぐくむことに重きを置いているのである。子どものキャリア発達を考えると、小学校から中・高等学校までの一貫した取組、すなわち系統的な生き方探究教育の推進が必要になってくる。

また、小学校は学級担任制という特色がある。指導者がすべての教育活動にかかわることにより、系統的な取組が可能となる。その上、同じ子どもたちを長時間、継続的に見ていけることにより、子どもの成長やつまづきなどにいち早く気づくことができ、より深い子ども理解が可能となる。このような小学校の利点を生かして、生き方探究教育に携わることが大切である。

以上のことから、小学校段階から発達段階に応じた生き方探究教育を実施することが必要不可欠であるといえる。教育のすべてにおいて、中・高等学校で学ぶことの基礎・基本になるのは、小学校段階で身につけた学びである。小学校での生き方探究教育の在り方が、その後の中・高等学校での生き方探究教育の展開に大きくかかわることを考えると、その役割は大変重要であることがわかる。将来の生き方や職業への「夢・あこがれ」をもち、よりよく生きるための資質・能力・態度の基礎を育成することに主眼を置き、小学校における生き方探究教育を系統的に進めていくことが求められているのである。

(2) 生き方探究教育にかかわる教育活動

〈概要編〉には、「教育課程のさらなる改善」として、「子どもたちのキャリア発達を支援する観点に立って、各教科・領域、総合的な学習の時間などあらゆる教育活動を体系化し、意図的・計画的・組織的に実施することができるように、各校種連携のもと、教育課程編成の在り方を見直し、創意工夫ある教育活動を展開しなければならない」(31)とある。

小学校の教育活動の中には、よりよく生活するための学習や、勤労観・職業観にかかわる学習内容が数多くある。そこで、各教科等の枠を超えて、横断的な取組を進めることが重要となってくる。さらに、それらを『共生』と『自立』の観点でとらえ直すことで、それぞれの活動の関連が明確になるとと思われる。

実際に生き方探究教育を進めるに当たっては、まず、既存の教育活動を、生き方探究教育でつきたい力「5領域17の力」に視点を当てて、整理し直すことが必要である。生き方探究教育は、決して新しい教育ではない。各教科等には、その特性に応じたねらいがある。生き方探究教育の視点で整理し直すということは、別のねらいを新たに設定したり、すでに行われている教育活動を大幅に変更したり修正したりすることではない。むしろ、

「5領域17の力」に関連のあるものを取り上げ、目標とつけたい力を整理していくことで、キャリア発達にかかわる諸能力がバランスよくはぐくまれていくのだと考える。

方法としては、各単元・各時間のねらいに応じて、「5領域17の力」から1~2程度の視点を絞り、意識的に組み込んでいくことが考えられる。また、生き方探究教育の学習プログラムの枠組みに当てはめて整理することも一つの方法である。このことについては、次章の第1節2項で詳細を述べることにする。

次に、足りない観点の教育活動を補うことが必要である。既存の教育活動を「5領域17の力」の観点でとらえ直してみると、不足している部分が見えてくる。その部分でどのような活動ができるのか考え、必要に応じて新たな活動内容を設定していくことが重要である。

小学校での具体的な活動としては、「推進の手引」の中に、「児童一人一人の発達に応じて、人、社会、自然、文化とかかわる体験活動を、身近なところから徐々に広げ、ていねいに設定していくことが大切である。また、係活動や委員会活動、清掃活動、勤労生産的活動等を通して、自らの役割を果たそうとする意欲や態度をはぐくんでいくことが大切である」(32)と記述されている。授業以外の、学校生活で毎日継続して行われる係活動、当番活動などの日常の活動にも目を向け、創意工夫を加えることもできる。また、学校だけでなく、家庭でのお手伝いなどの中で、自分の役割を果たそうとする意欲や態度を育てていけるよう、意図的に働きかけることも必要である。このように、生き方探究教育にかかわる体験活動を有効に活用するということが大切になってくる。

現在、本市では地域の職場訪問をはじめ、京都市スチューデントシティ学習、京都子どもモノづくり事業など、実態に応じた工夫ある教育活動が進められている。それぞれの体験活動と連携しながら、教育活動を展開することが望まれる。

さらに、生き方探究教育を進めるにあたっては、子ども一人一人の心に寄り添い、キャリア発達を支援することが大切である。そこで、指導者は、個に応じた生徒指導や教育相談活動を充実させることも忘れてはならないと考える。

以上のことから、「共生と自立」の視点に立った教育活動の充実を図るため、生き方探究教育にかかわる各教科等の授業実践例を提示していく必要があると考えた。第2章では、今実践されてい

る教育活動を見直し、「自己の夢をつくりあげる力」をはぐくむ実践例を提示するための授業改善の工夫や、子どもとのかかわり方について述べる。

- (1) 厚生労働省『労働経済白書 平成19年版 ワークライフバランスと雇用システム』国立印刷局 2007.8 pp. 26~28
- (2) 前掲(1) p.27
- (3) Benesse 教育研究開発センター『第1回 子ども生活実態基本調査報告書』ベネッセコーポレーション 2005.8 p.80
- (4) Benesse 教育研究開発センター「[調査]『自分に不満』な子どもたち Benesse 教育情報サイト」2008.12.22 <http://benesse.jp/blog/20051020/pl.html>
- (5) 文部科学省『キャリア教育推進の手引—児童生徒一人一人の勤労観・職業観を育てるために—』2006.11 p.1
- (6) 文部科学省『キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書』2004.1 p.7
- (7) 服部次郎「子どもの社会的自立とキャリア教育」『子どもの「社会的自立」の基礎を培う』教育開発研究所 2007.4 p.108
- (8) 渡辺三枝子『キャリア教育—自立していく子どもたち』東京書籍 2008.3 p.20
- (9) 前掲(8) p.19
- (10) 巻野恭明「No.504 すべての子どもたちの未来を拓くキャリア教育とは—小・中学生の勤労観・職業観を含む生き方についての意識調査より—」『平成17年度研究紀要』京都市総合教育センター 2005.3 p.114
- (11) 京都市教育委員会『生き方探究教育 京都市スタンダード〈試案〉』2006.2
- (12) 京都市教育委員会『生き方探究教育 京都市スタンダード〈概要編〉』2008.4
- (13) 京都市教育委員会『生き方探究教育 京都市スタンダード〈実践事例編〉』2008.4
- (14) 前掲(12) p.2
- (15) 国立教育政策研究所生徒指導研究センター『児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について』2002.11 別紙
- (16) 前掲(12) p.6
- (17) 前掲(11) p.14
- (18) 前掲(12) p.5
- (19) 前掲(10) p.123
- (20) 巻野恭明「No.514 すべての子どもたちの未来を拓く生き方探究教育(キャリア教育)とは—II—小学校6年社会科、中学校3年社会科の実践を通して—」『平成18年度研究紀要』京都市総合教育センター 2006.3 p.207
- (21) 岡村太郎他「夢をかなえる小学校からのキャリア教育—キャリア教育モデルプラン(小学校版)の構想—」『平成16年度研究紀要 第13号』千葉市教育センター 2004.3 p.23
- (22) 土橋直美他「キャリア教育推進に関する調査研究(中間報告)」『平成19年度研究紀要 第96集』愛知県総合教育センター 2008.3 p.13
- (23) 三村隆男『キャリア教育入門』実業之日本社 2004.11 p.171
- (24) 前掲(5) p.1
- (25) 前掲(6) p.5
- (26) 内藤勇次『生き方の教育としての学校進路指導』北大路書房 1991.3 p.123
- (27) 中央教育審議会『初等中等教育と高等教育との接続の改善について』1999.12 p.39
- (28) 前掲(12) p.2
- (29) 前掲(15) 別紙
- (30) 前掲(5) p.30
- (31) 前掲(12) p.5
- (32) 前掲(5) p.30

第2章 「自己理解能力・将来設計能力」を育てる教育活動

第1節 「自己の夢をつくりあげる力」に視点を おいた 授業改善

(1) 「自己の夢をつくりあげる力」とは

第1章でも述べたが、生き方探究教育とは、共生と自立の視点に立ち、自らの“在り方”や“生き方”を確立する教育である。小学校段階においては、将来の生き方や職業への「夢・あこがれ」をもち、よりよく生きるための資質・能力・態度の基礎を育成することが重要である。

生き方探究教育の現状とこれらのことから、自分の特性を認識し、将来展望をもって努力する子どもを育てることが大切であり、「自己の夢をつくりあげる力（自己理解能力・将来設計能力）」の領域に焦点を当てて実践を進める必要があると考えた。

〈概要編〉によると、「自己の夢をつくりあげる力」とは、「自己理解能力」「将来設計能力」をつけたい力とし、次のように記されている。(33)

夢や希望を持って将来の生き方や生活を考え、社会の現実を踏まえながら、前向きに自己の夢(将来)の実現を設計する力

「夢をつくりあげる」とは、自己理解することによって描いた「夢やあこがれ」を実現させていく過程であると考え。ぼんやりと思い描いた「なりたい自分像」を徐々にはっきりと具現化していくためには、見通しをもち、現状を踏まえながら計画を立て、行動することが大切である。この過程で、何度も計画を練り直し、選択・決定を繰り返すことが、「なりたい自分」に少しずつ近づくことにつながると考えた。

「自己の夢とは何か」と問われると、職業や職種を想起する場合がある。しかし、それだけではなく、「困っている人を助けることのできる人になりたい」「最後まで頑張り通すことのできる、心の強い人になりたい」といった、「どのような自分で在りたいか」ということも「自己の夢」に含まれると考える。また、何年も先の“大人になったときの姿”だけではなく、比較的近い将来である“1年先や1ヶ月先、明日の自分の姿”を思い描くことも「自己の夢」ととらえることができる。

この「自分の未来像」「自分がどう在りたいか」ということを考える際には、自己理解能力が必要

となる。今の自分はどのような自分なのか、能力や適性、感性などの自分の特性は何かを知ることにより、将来の夢やあこがれを描くことができると考えるからである。

図2-1は、「自己の夢をつくりあげる力」をはぐくむ要素についてまとめたものである。

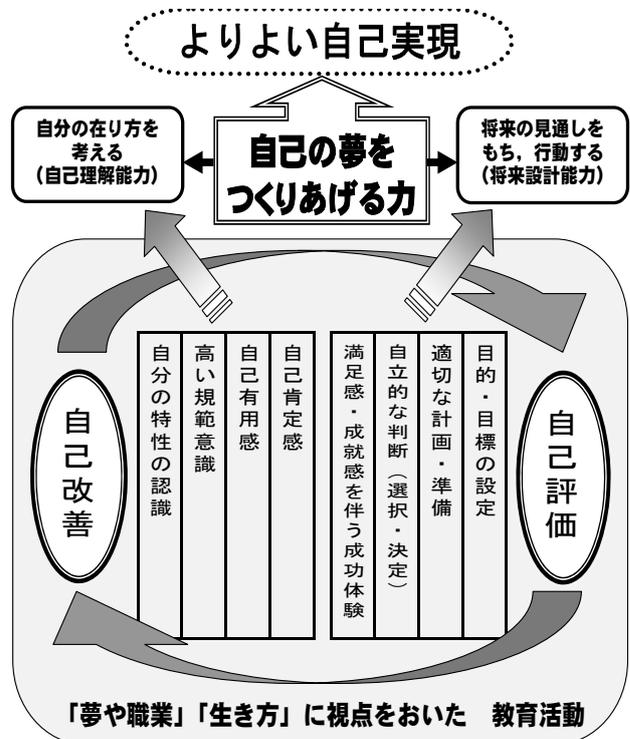


図2-1 「自己の夢をつくりあげる力」をはぐくむ要素

将来の生き方や生活を考えるにあたっては、自分の特性を知るといった自己理解を深めた上で、夢や将来像を描き、自己実現をめざすことが必要となってくる。

(a) “自己理解能力”をはぐくむ4つの要素

自分が自分自身について考える“自己理解能力”をはぐくむためには、次の4つの要素が必要であると考えた。

1つめは、**自分の特性の認識**である。これは、ありのままの自分を見つめ、自分の良さや適性、克服すべき課題などを知ることである。これは、自分一人の力ではできるというものではなく、家庭・地域・社会の様々ななかかわりの中で気づき、自分の特性の認識を深めていくものである。

2つめは、**高い規範意識**である。これは、社会的自立に欠くことのできない公共心や自立心を含む規範意識を身につけ、高めていくことである。また、基本的な生活習慣や物事の善悪の判断、約束やきまりを守るなど、道徳性や感性に働

きかけることも大切となってくる。

3つめは、**自己有用感**である。これは、様々な人や社会とかかわる体験を積み重ねる中で、「自分は認められている」「自分は受け入れられている」「自分は誰かのために何かができる」「自分には自分の役割がある」ということに気づくことである。社会の中の一員であることや、自分の役割に気づくことにより、自分の存在の意味や価値を改めて知るのである。

4つめは、**自己肯定感**である。これは、自分のありのままの姿を受け入れ、自分のことを肯定的にとらえるということである。自分の長所も短所も含め、自分のことを大切だと考えられることが大事である。「自分はだめな子だ」ととらえるのではなく、「この部分ができているけれど、自分はきっとこれだけのことができるようになる」「自分は変えられるのだ」というプラスの発想で自己をとらえ、成長を実感できるようにすることが、自信や向上心につながると考える。

(b) “将来設計能力”をはぐくむ4つの要素

一方、将来の見通しをもち、行動する“将来設計能力”をはぐくむためには、次の4つの要素が必要であると考えた。

1つめは、**目的・目標の設定**である。これは、何のためにこの学習をするのか、何をねらいにして学習を進めるのかを明確にもたせるということである。行き先や道順がわからないまま走り出すというのでは、不安が募り、疲労困憊してしまうことになりかねない。「この学習を通して、自分は何を学ばなければならないのか」「この学習を終えたとき、どのような自分になりたいのか」といった目的や目標をはっきりさせることにより、学習意欲が高まることになると考える。目標については、集団全体のめあてに基づいた、一人一人に応じた個人内目標を設定させることが大切である。子どもの発達段階や実態に応じて、設定する目標の質を高めていくことも必要である。

2つめは、**適切な計画・準備**である。これは、目標に向かってどのような手順を追って学習を進めていけばよいのかを考えるということである。段階を踏んだ計画を立てることにより、見通しをもって学習を進めることができる。「次にあの活動をするために、今はこのことをする必要がある」「次の活動をするためには、このような準備をしておかなければならない」という具体的な行動が見えてくるため、この要素においても、学ぶこと

への関心・意欲の向上が期待される。

3つめは、**自立的な判断（選択・決定）**である。これは、子どもが自分自身で課題解決のための方法を考え、様々な選択肢を比較検討し、自分に適しているものを選び、決定するということである。「誰かから指示されたことや決められたことをする」受身的な行動ではなく、「自分の意志のもとで選び、決める」主体的な行動をとることにより、自分の行動に責任をもつということにつながる。

4つめは、**満足感・成就感を伴う成功体験**である。これは、学校や地域、社会との様々なかかわりの中で、多くの人と交流したり、集団宿泊活動・職業体験活動・奉仕体験活動など、子どもの発達段階に応じた体験活動を進めたりしていくということである。体験での成功を重ねていくことにより、「やってよかった」「かかわった人たちが喜んでくれた」「みんなで力を合わせて一つのことをやりとげた」「前よりもいいものができる」といった思いが増えていき、「また次もやってみたい」という意欲にもつながる。

以上の8つの要素を、各教科等におけるすべての教育活動で意識することにより、自己の夢（将来）の実現を前向きに設計する子どもが育成できると考える。そのためには、これらの8つの要素を「夢や職業」「生き方」に視点をおいた教育活動の中に意図的に組み入れていくことが大切になる。

ただし、これらの要素を踏まえた教育活動を充実させるには、それぞれの活動において適切な「自己評価」を行い、その評価を基に、積極的な「自己改善」を試みるといったことを繰り返し行う必要がある。これらは、学習のまとめの段階で行うだけでなく、その段階の途中でも適宜行うことが望ましいと考える。

これらのことを踏まえ、「自己理解能力・将来設計能力」を育てるために、日々の授業の中で創意工夫ある実践を進めることが重要である。例えば、「目標」や「夢」「希望」をもって子どもたちが教育活動に取り組めるような工夫をする、よりよい方法を判断し、自分のことは自分で決定できるような場を設定する、成就感・満足感が得られるような役割遂行の経験や成功体験を積むことのできる場を用意することなどが大切である。さらには、人や社会とのかかわりの中で学んだ技能や知識を、次の活動や自分の将来設計に生かすことができるようにする。自分と向き合う時間や場を設定し、肯定的な自己理解ができるように指導者が支援することも大切だと考える。

次に、どのような学習活動を展開すればよいのかを述べていくことにする。

生き方探究教育は、新たな教育活動をつけ加えて設定し、展開するといったものではない。既存の教育課程を、生き方探究教育でつきたい力「5領域17の力」に視点を当てて整理し直し、創意工夫ある教育活動を展開していくことであり、決して特別なものではないと考えている。

各教科等において学習を進める際、既習内容がどの程度定着しているかを把握した上で、学習展開を考えていく必要がある。定着していない内容については、その部分の学習を補うことも必要になってくるからである。

これと同様、生き方探究教育を進める上でも、学習計画を立てて授業を行う前に、子どもたちのキャリア発達について実態を把握し、分析しておく必要があると考える。

そこで、本研究では、実践授業を行う前に研究協力校の子どもの様子を把握するため、授業を参観した。その後、教員・児童に対し、生き方探究教育にかかわるアンケート調査を実施し、子ども一人一人の実態を把握した。実態把握の方法については、今回はアンケートによる調査という形をとったが、各学校でも、それぞれ工夫して実態把握を行うことが必要となってくる。

そして、実践授業を行うに当たり、子どもの実態を踏まえた上で、発達段階に応じた《めざす子どもの姿》を設定した。

《めざす子どもの姿》

低学年：自分のめあてをつくる。
 中学年：目標に向かって、今やるべきことを理解する。
 高学年：将来のことを考え、夢に向かって努力する。

これは、研究協力校の実態に基づいて設定し、作成したものである。したがって、各学校で実践を進める際には、それぞれの実態に即したものを設定することが望ましい。

実態把握をした後、各教科等における学習計画を立案した。ここで大切にしたいことは、従来の各教科等のねらいや活動内容を大幅に変更したり修正したりするのではなく、「夢や職業」「生き方」に視点をおき、学習計画を見直すということである。系統的・横断的に各教科等の関連を考えながら、単元の順序を入れ替えたり、足りない観念の教育活動を補ったりすることも必要になる。

右の図2-2は、本研究の進め方についてまとめたものである。

自己の夢をつくりあげる力（自己理解能力・将来設計能力）を育てる指導とは…？

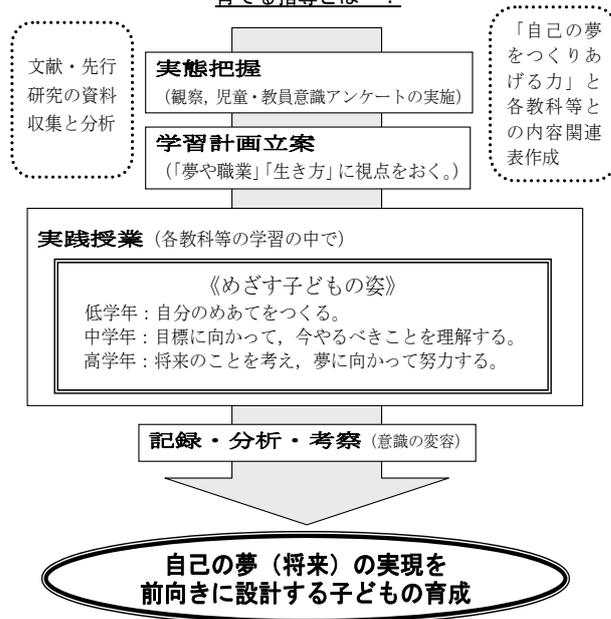


図2-2 研究の進め方

このように、「夢や職業」「生き方」に視点をおき、各教科等の学習においてどのような工夫をしていけば、「自己の夢をつくりあげる力（自己理解能力・将来設計能力）」を育成することができるかを考えることにした。そこで、学習内容を系統的・横断的に見直す際には、各教科等の学習内容と「自己の夢をつくりあげる力（自己理解能力・将来設計能力）」との関連がわかるものが必要となると考え、内容関連表（付表1～6）を作成した。これは、一つの例であり、各学校の実態に応じて作成されることが望ましい。

（2）学習指導案・学習活動案の工夫

指導者が、より意識して子どもの「自己の夢をつくりあげる力」を育成する取組を進めるためには、学習指導案や学習活動案にも工夫が必要であると考えた。「自己の夢をつくりあげる力」である自己理解能力・将来設計能力とは、抽象的で目に見えない力であり、子どもにその力がどれだけついたのかを、数値などで明確に表すことは難しい力でもある。だからこそ、指導者の誰もが意識して指導ができるように、目に見える形で学習指導案や学習活動案上に、具体的な支援とつきたい力を表していく必要があると考えたのである。

次ページの表2-1は、第2学年生活科「わたしのまちをたんけんしよう」の学習活動案である。

この指導計画の中に、「生き方探究教育において育てたい力」の欄を右側に設け、毎時間、重点的

に意識して育てたい力を明記することにした。子どもにつけたい「5領域17の力」を、太字と（ ）で示している。できるだけ、1時間につき一つの力に絞って掲載した。

この工夫により、指導者は、「生き方探究教育において育てたい力」を、いつ、どの学習活動で意識して指導すればよいのかがひとめでわかるようになる。また、単元全体を見渡したとき、5つの領域がバランスよく指導できているかなどの確認をすることができる。さらに、必要に応じて、足りない観点の学習活動を補充することもできる。

表2-1 第2学年生活科学学習活動案（指導計画の一部）

過程	学習活動	○支援 ・留意点	評価(関・思・気)と 評価の視点(方法)	生き方探究教育に おいて育てたい力
む か う	<p>◎◎◎◎もういちどたんけんしよう</p> <p>○もっと詳しく知りたいことを決めて、聞いてみたいことや知りたいことを話し合う。</p> <p>○2回目の探検に出かけ、知りたいことを聞いたり、調べたりする。</p>	<p>○カードに探検の目的や場所、約束などを書くことによって一人一人が自分の探検の見通しがもてるようにする。</p> <p>・探検できる時間や範囲を提示し、持ち物なども決めるようにしておく。</p> <p>・前回の探検活動を思い起こし、自信を持って取り組めるよう、見学やインタビューの仕方などについて話し合う活動を取り入れる。</p> <p>○店や施設に着いたときの挨拶や応対を事前に指導しておくことで、知りたいことが相手にきちんと伝わるようにする。</p> <p>・あらかじめ決めていた質問内容だけではなく、実際に見たり、聞いたりして、聞いてみたいと思ったことを聞くように助言する。</p>	<p>【関】探検する場所やきまりなどを決め、目的をもって探検の準備をしようとしている。 (行動観察) (作品分析)</p> <p>【思】いろいろな人や場所とのかかわりを持ち、探検することができる。 (行動観察) (作品分析)</p>	<p>意志決定能力 (自分の課題を見つけ解決する)</p> <p>自己理解・将来設計能力 (計画を企画し実行する)</p> <p>情報活用能力 (情報を収集し探索する・職業について理解する)</p> <p>人間関係形成能力 (コミュニケーションを豊かにする)</p> <p>社会参画能力 (地域と共に生きる)</p>

表2-2は、本時の目標・展開を示したものである。本時の展開の支援の欄の中には、生き方探究教育を進める上で大切にしたい視点を、「5領域17の力」の番号とともに太字で明記した。生活科学学習活動案の本時の展開の中には、以前から支援や留意点が示されている。その支援を、生き方探究教育でつけたい力と照らし合わせてみると、重複箇所や類似点が見えてくる。このように太字で明記することにより、本時の展開中でも生き方探究教育でつけたい力を意識し、指導や支援を行うことができる考えたのである。

また、支援の欄内に、同じように、相談活動による支援を「相」で明記することにした。相談活動とは、一人一人の子どもに応じた指導者による聞き取りや言葉かけなどのことを指している。この工夫により、子どもが考えたり、選択・決定したりする学習場面で、指導者は、子どもの自己の

在り方や生き方に迫る聞き取りをしたり、学習意欲を高めるような適切な言葉かけをしたりすることができる考えたからである。また、必要に応じて、相談活動の際に活用できそうな資料などを事前に準備しておくこともできるからである。これらのことが、子どもの自己肯定感や自己有用感を高めることにつながると考えた。

相談活動の具体例については、第2節で詳しく述べることにする。

表2-2 第2学年生活科学学習活動案（本時の目標・展開）

学 習 活 動	○支援 ・留意点	相相談活動	評価	※準備物
○前時の学習を想起する。	・グループで何(どこ)を探検するのか、もっと知りたいことや不思議に思うことはどんなことか、前時にたんけんカードに書いておく。			
○本時のめあてを確認する。	グループのみんなで、「お気に入り」や「すてき」を見つける町探検(パートⅡ)に行くための計画を立てることができる。	グループのみんなで、まちたんけん(パートⅡ)のけいかくを立てよう。		※校区地図
○町探検(パートⅡ)の目的や話し合う内容について知る。	○(V-④) 前回の町探検よりもっと詳しく調べるといふ目的や、何を話し合うのかという視点を明確にすることにより、 学習の見通しをもてるようにする。	<p>なに(どこ)をたんけんするのか どんなことをインタビューして たずねるのか なにをもっていくのか グループのやくそくはどうするか</p>		※フラッシュカード
○グループに分かれて話し合う。	○(V-⑤) 一人一人の思いや考えを大切にしよう声かけすることにより、 聞き手・話し手といった役割を考え話し合いに参加できるようにする。	<p>どんなおしごとをしているのかきいてみたい。 この前は中に入れなかったから、なにをうっているのか見てみよう。 インタビューしておしえてもらったことを書くメモとえんぴつをもっていこうよ。 あいさつをしっかりすることをグループのやくそくにしてしよう。</p>		<p>※たんけんカード(各自) ※たんけんけいかく書(グループに1枚)</p> <p>【関】知りたいことを明確にして質問にまとめたり、持ち物やきまりを相談したりして、まちたんけん(パートⅡ)の計画を立てようとする。(行動観察)</p>
○話し合っただけで済んだことを発表する。	○友達を発表を聞いて、自分たちもやってみようと思うことがあれば取り入れても良いことを伝えることにより、いろいろな方法で探検ができるようにする。			
○今日の活動を振り返る。	○(V-⑥) ふりかえりカードに本時の自己評価をすると同時に次時の課題・めあてを書き留めることにより、 次時以降の活動の見通しが持てるようにする。 また、後から再度読み返すことにより、 自分の成長がわかるようにする。	相 自分で立てためあてが達成できるように励ましの言葉をかけることにより、まちたんけん(パートⅡ)に出かける意欲が高まるようにする。		※ふりかえりカード

さらに、本時の評価については、別の評価項目を新たに設定するのではなく、各教科等の評価項目と生き方探究教育でつけたい力とを矢印でつな

ぎ、関連がわかるように工夫した。各教科等には、その特性に応じた目標が設定されている。本時の目標を受けて設定された評価項目を、生き方探究教育の視点でとらえ直すことにより、本時の展開の支援と同様、ここでも、つきたい力との重複箇所や類似点が見えてくる。各教科等の学習でねらいが達成できたかを評価することは、生き方探究教育でつきたい力をはぐくむことと重なる部分が多い。こうした工夫により、生き方探究教育でつきたい力をより意識した評価活動を行うことができると考えたのである。

学習指導案や学習活動案上にこれらの工夫を加えることにより、指導者の生き方探究教育に対する意識は高まり、より充実した教育活動が展開されることが期待できる。

第2節 一人一人を大切にした

個に対する働きかけ

(1) キャリア発達を支援する相談活動

「協力者会議報告書」は、キャリア教育の基本方向として、「子どもたち一人一人のキャリア発達を支援し、きめ細かく温かく支えていく」ためには、「子どもたちの実態とその置かれている状況を的確に把握するとともに、子どもたち自身が自己のよさや可能性に気づき、それぞれが夢や希望をもち、その実現に向けて努力する過程を組織的、継続的に指導・援助していくことが大切である」(34)と示している。

また、同報告書は、「子どもたちのキャリア発達は、自己の新たな可能性の発見や自己理解の深化といった内面の成長と深くかかわっている」ことを踏まえ、「キャリアに関する個別あるいはグループ単位でのカウンセリングの機会の確保と質の向上に努め、子どもたちの意識の向上や変容を促し、自己の可能性の発見や実現へのさらなる意欲を呼び起こすことができるようにすることが大切である」(35)としている。

これらのことから、生き方探究教育を進めるに当たっては、子どもたちがよりよい自己の在り方や生き方を考えて将来を設計していくことができるようにするための、個別またはグループ別に行う、継続的・意図的な指導や支援が必要だと考える。子どもが、自己評価・自己改善を繰り返し、よりよい自己実現への過程を歩む中で、指導者は一人一人のキャリア発達をきめ細かく見取り、自己理解をうながし、よりよい選択・決定ができる

ように、個別的な働きかけをすることが重要だと考えたからである。

そこで、前項で述べたように、指導者によるこのような個に対する指導・支援を、「相談活動」として位置づけた。これは、現在の行動・態度やものの見方・考え方・感じ方を、将来の夢や生き方といかにつなげるかという、生徒指導や進路指導の考え方と重なるものであり、「一人一人の生き方の指導や選択・決定の援助」という点で、共通点があるものである。

この相談活動は、深刻な課題があると判断される子どもだけを対象にするものではない。個人差はあるものの、どの子どもも成長していく過程の中で課題や困っている部分をもっているという認識のもと、目の前にいるすべての子どもたちを対象にした“心をはぐくむ場”として相談活動をとらえることが大切だと考える。

清水によると、学級相談活動には次の4つの目的があるとしており、その著書の内容を踏まえて、筆者なりの解釈を下段に加えた。(36)

①「自己表現への指導・援助」

※ 読み、書き、話すといった表現活動を充実させるだけでなく、自分の思いや考えをもち、安心し、自信をもって表すことができるようにするものである。

②「自己理解への指導・援助」

※ 子どもたちの実態とその置かれている状況を的確に把握し、子どもが長所や短所も含めた自分の特性に気づくことができるようにするものである。

③「自己受容への指導・援助」

※ 自分があるがままに受け入れることができるようにするものである。このことにより、他者を理解することもできると考える。

④「自己実現への指導・援助」

※ 自分の個性や能力を具現化し、発展させることができるようにするものである。

教育活動の中で、前述した4つの目的をもって一人一人を大切にした、個に対する相談活動を行うことにより、子どもの行動や考え方のよりよい変容をうながすことができると考える。

生き方探究教育にかかわる教育活動においては、次のような場面で相談活動を具体的に行うことが考えられる。「今、どのような自分なのか」を知るという現状を理解する場面、「いつ、何をしたらよいのか」を考える計画・将来設計の場面、「どのように行動するとよいのか」という行動に移す場面、「したいことは何か、どのような自分になり

たいのか」ということを振り返り、夢や希望につなげていく場面である。これらの場面で、相談活動を適切に行うことにより、子どもが自らの生き方を主体的に選択・決定し、よりよく生きていこうとする意欲・態度や能力がはぐくまれ、個に応じたキャリア発達を支援できると考えた。

以上のことをまとめて、生き方探究教育にかかわる教育活動での相談活動の働きを表したものが、図2-3である。

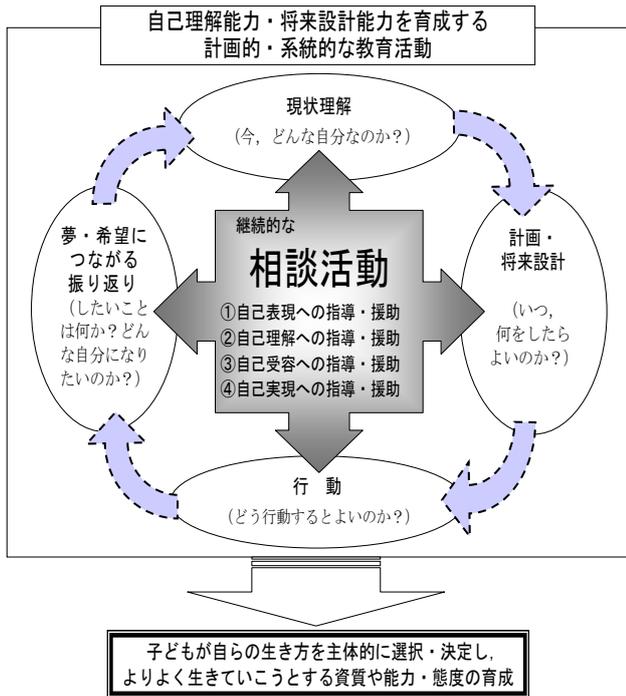


図2-3 相談活動の働き

相談活動の具体例としては、生き方探究教育の視点を取り入れた子どもへの言葉かけや、子どもの言葉や思いを聴くこと、子どもと対話すること、子どものノートや作品に指導者から一言メッセージを書き込むことなどの活動が考えられる。より深く子どもを理解するためには、肯定的・受容的・共感的な態度で子どもと向き合うことが大切である。また、子ども一人一人のキャリア発達をしっかり把握し、それらを分析して、成果や課題をどのように今後の学びに生かしていくのかを考えていくことが大切である。

相談活動とは、あらかじめ時間と場を設定して行う面接のようなものとは限らない。教育活動すべての場面で、適宜行われるものである。授業場面で、指導者が子どもの机間指導の際に行ったり、休み時間や放課後、係の活動をしている際に行ったり、給食指導の際に行ったりすることが考えられる。さらに、家庭学習で書いてきた日記などが

ら、子どもの心の変化を読み取り、メッセージを書き込むこともできる。例えば、「このごろ、学校から帰ったら、毎日犬を散歩に連れて行っていると聞きました。学校でも、メダカのえさやりを一日も忘れなくなった〇〇君。生き物を大切にするということだけでなく、自分の役割について責任をもつことの重要さがわかってきたのですね。」というように、学校生活で見える部分だけでなく、その子の生活背景にもかかわる、個に応じた言葉かけをすることにより、相談活動の価値はますます高まると考える。このように、様々な場面で機会を設け、個別またはグループ別に、適切な指導や支援を指導者が行うことが大切である。

また、相談活動を行う際には、子どもの作品や振り返りカードを用意しておくなど、子ども理解の参考になる資料を事前に準備しておくことも有効である。これらの資料が手元にあることで、個に応じた確かな指導・支援ができるからである。

さらに、相談活動の経過を、指導者は記録しておくことが必要になってくる。子どもの変容を記録することは、子ども理解や評価に役立つだけでなく、指導の成果と課題を把握することができ、次時の学習指導に生かすことができると考える。

相談活動は、学級担任だけが行えばよいというものではない。養護教諭や特別な知識・技能をもったカウンセラーをはじめ、全教職員が相談活動の意義を共通理解し、子どもと継続的に、温かなかかわりをもつことが大切であると考えられる。

(2) 次時や将来に生かす評価活動

前述したとおり、生き方探究教育がめざしているのは、「地域・社会とのかかわりの中で生き方を考え、生きる力をはぐくむ」ことである。生き方探究教育でつきたい力である「5領域17の力」は、目に見えない抽象的なものであり、数値で評価できるものではない。また、客観的な指標で厳密に評価することは難しい一面がある。そこで、指導者は、様々な場面での子どもの様子をできるだけ詳細に記録として残し、それらを評価として生かすことが大切になってくる。

また、生き方探究教育では、常に自分を振り返り、自分の在り方を見つめ、改善していくことが大切である。そこで、評価活動は、結果を見るために学習の最終段階だけで行うのではなく、学習の途中段階でも行う必要があると考える。子どもたちは、めざす子どもの姿に向かって変容しつつあるのか、また、学習を終えたとき子どもはどの

ような姿になったのか、成果と課題が何なのかということをはっきりさせる必要があると考えたからである。

〈概要編〉には、生き方探究教育における児童生徒に対する評価について、「個々の児童生徒の積み上げてきたキャリアをベースとして、具体的な取組においてどのような力が育ったのかを見とる個人内評価がベースとなる」(37)と記されている。このことから、生き方探究教育における評価は、子どもによる自己評価を大切にしながら、子ども同士の相互評価、指導者による活動の観察や作品の分析評価などで総合的に行うことが必要である。

また、「自己理解能力・将来設計能力」を育てる教育活動を考えたときに、子どもが今の自分の姿や能力を的確に把握し、これから先の自分の姿を思い描く力、つまり目標を設定する力が必要になってくる。そこで、自己評価カードに工夫を加えることにした。

図2-4は、第2学年で活用する自己評価カードの一部である。このカードは、主に授業の最初と最後に活用する。

～ ぶりがえりカード No. ～

わたしのまぢをたんけんしよう

まんぞくマークには、いろをぬりましょう。

2年 くみ()

とてもよくわかった
とてもよくできた

ふつう
まあまあ

あまりわからなかった
あまりできなかった

日にち	学しゅうのめあて	まんぞくマーク	がんばったこと・こんどやってみよう
6 / ()	①	😊 😐 😞	
6 / ()	②	😊 😐 😞	

図2-4 自己評価カード（第2学年生活科）の一部

授業のはじめには、教科の学習のねらいをもとにした自分のめあてを立てる際に活用する。ここで大切になってくるのは、自分自身のめあては教科の目標に沿ったものであることと、なりたい自分の姿をできるだけ具体的に示すということである。学習のめあてというと、「最後までしっかり話をきく」「たくさん発表する」といった態度面のみを挙げる子どもがいるが、目標設定の場面においても相談活動を行い、具体的な目標を自分の力で設定できるように支援することが大切である。

授業の最後に活用する際には、自己評価として、学習時間の満足度を3段階で評価し、「がん

ばったこと」や「こんどやってみようこと」などの一言感想を文章で書く。この欄に書いた成果や課題が、次時の学習のめあてを立てるときに役立つと考えた。「学校以外の家庭や地域でもやってみよう」といった、社会生活への関心が広がることにも期待している。

授業の最初と最後に自己評価活動を毎時間行うことにより、どのような活動をしてきたのかといった学習のあしあとを残すことができる。そして、このカードにその記録を残すことで、単元を通してどのような力がついてきたかを自分自身で振り返ることもできる。

このような学習のあしあとがわかる自己評価カードやポートフォリオなどを作成して、振り返りや目標設定に活用していくということも、「自己理解能力・将来設計能力」を育てる上で大切であると考えられる。自分の目標を立て、それについての評価を自分自身で行うこと、そして、成果や課題を次の学習や将来の生活に生かしていくことは、学習意欲の向上につながる。

ここで、評価活動に生かすことのできるポートフォリオについて述べておく。

「自分の在り方や生き方を考える」という目的をもったポートフォリオを作成する際には、単元や教科などの枠にとらわれず、生き方探究教育にかかわる学習資料や調査メモ、作品などを綴じていくようにしたい。例えば、学校行事の振り返りで書いた作文や、係活動の自己評価カード、1分間スピーチの原稿などもポートフォリオの材料になると考えられる。

また、収集したものを、学習の節目や単元の最後に自分自身で読み返すという機会を設定したい。その際、必要なものかどうかを取捨選択して整理する時間を確保することが大切である。自分の思いや考えがどのように変わってきたのかという成長を振り返ることにより、自分の良さを見つけ、自己肯定感が高まると考えるからである。

以上のような工夫を取り入れながら、「自己理解能力・将来設計能力」に視点をおき、授業改善を行った。第3章では、第2学年・第4学年・第6学年の実践授業の様子を報告する。

(33) 前掲(12) p. 8

(34) 前掲(6) p. 18

(35) 前掲(6) p. 19

(36) 清水勇他『学級で活かす教育相談』ぎょうせい 2001.1 pp. 13~17

(37) 前掲(12) p. 57

第3章 小学校での実践授業を通して

実践授業を行うに当たっては、前章第1節で述べたように、子どもの実態を把握した上で、発達段階に応じた《めざす子どもの姿》を設定する必要がある。また、「夢や職業」「生き方」に視点をおいた教育活動が展開できるよう、「5領域17の力」を意識して学習計画を立てる必要がある。前にも述べたように、このとき教育活動に、『共生』と『自立』の二つの観点をバランスよく取り入れることが大切となってくる。

本研究では、「自己理解能力・将来設計能力」に焦点を当てて実践授業を行った。〈概要編〉では、「自己の夢をつくりあげる力（自己理解能力・将来設計能力）」の領域を5つに分け、大切にしたい子どもたちの姿を次のように示している。(38)

(5) 「自己の夢をつくりあげる力」 (自己理解・将来設計能力)



- ⑬【自分の社会的役割を認識する力】
生活・仕事上の多様な役割や意義及びその関連等を理解し、自らの果たすべき役割等についての認識を深めていく。
- ⑭【計画を企画し実行する力】
目標とすべき将来の生き方や進路を考え、それを実現するための進路計画を立て、実現に向けて行動する。
- ⑮【心理的な自ら自立を図る力】
生活・学習上の多様な役割や意義等を理解し、自らの夢の実現に向けて価値観、信念、理想を確立して生活設計を組立てる。
- ⑯【社会的な自ら自立を図る力】
自分の身近なところから、何事についても自分の意志で決め、自分の力で取り組んでいけるよう自立意欲を向上する。
- ⑰【意欲的に学ぼうとする力】
生きることへの自信と目標を持ち、基本的な生活習慣を身につけるとともに、子どもたちの主体的学習を促し、社会で適応できる学力を向上する。

これらの力と各教科等の学習内容との関連、各教科等の横断的なかかわり、また、他学年の学習内容との系統性などを考慮して授業を展開していくことが、「自己理解能力・将来設計能力」をはぐくむことにつながると考えた。

本章では、第2学年・第4学年・第6学年のそれぞれの授業実践で工夫したことと、子どもたちの姿について報告する。

第1節 第2学年「生活科」

～自分のめあてをもち、計画を立てることの 大きさがわかる取組～

(1) 実践授業での工夫

生活科「わたしのまちをたんけんしよう」(全18時間)の目標は、以下のとおりである。

〈生活への関心・意欲・態度〉

- ・春の地域の自然や人々とその暮らしに関心をもつとともに、それらに親しみをもち、自分の生活を広げようとする。

〈活動や体験についての思考・表現〉

- ・町探検で地域の自然や人々、公共施設とのかかわりを広げるとともに、見つけたことや気付いたことを自分なりの方法でまとめたり表現したりすることができる。

〈身近な環境や自分についての気付き〉

- ・町探検を通して、町の施設やそこで働く人々に関心をもち、それらと自分の生活とのかかわりに気付く。

(39)

ア) 学習計画について

本単元は、身近な地域を探検し、人や社会、自然とのかかわりながら学習を進めていく。A校第2学年の子どもは、担任の指導のもと、全員で遠足などに出かけた経験はあるが、グループでの校外活動は未経験であるということである。また、自分たちで学習計画や活動計画を立てて実行するという経験が少ないということである。これらの実態と、町の「すてき」や「お気に入り」を見つけることにより、自分たちの住む地域の素晴らしさにあらためて気づくようにしたいという指導者の願い、そして筆者が設定した低学年の《めざす子どもの姿》である、「自分のめあてをつくる。」ということを踏まえ、学習計画を立てることにした。

まず、1回目の探検では、町の公共施設やお店に着目し、2回目の探検ではそこで働く大人に着目して学習を進めていくことにした。働く大人に目を向けることにより、子どもたちの身近なところで働く人々の様子に興味・関心をもち、様々な職業があることに気づくことができると考えたからである。

次に、自分たちで探検したい場所を決め、見たいことや調べたいことをはっきりさせ、目的意識をもって活動できるようにした。自分たちのグループで計画・準備することにより、自立意欲が向上すると考えたからである。

さらに、インタビューを中心に探検活動を進め

るようにした。公共の場でのマナーや見学の仕方、インタビューのときの言葉遣いなどに気をつけて行動することにより、人との適切なかかわり方を知り、コミュニケーション能力が身につくと考えたからである。

単元計画については、小学校生活科の指導計画(40)を活用した。国語の時間を使ってインタビュースキルの学習をするなどの工夫を加えながら、前記の三つに重点をおいて学習を進めた。

なお、指導計画の一部については、第2章の第1節2項に掲載している。

イ) 育てたい力との関連について

図3-1は、生活科の学習計画と、生き方探究教育において育てたい力「5領域17の力」の関連を示したものである。

～第2学年 生活科「わたしのまちをたんけんしよう」～

学習計画	生き方探究教育において育てたい力 (5領域17の力)	
(1) 町のひみつをおしえ あおう。	①自分と他者を理解する力	人と共に生きる力(人間関係形成能力)
(2)(3)(4) たんけんのけいかくを たてよう。	②コミュニケーションを豊かにする力	
(5)(6) 町をたんけんしよう。	③世界に視野を広げる力	
(7)(8) 見つけたことをつたえ あおう。	④地域と共に生きる力	社会で共に生きる力(社会参画能力)
(9)(10)(11)(12) もういちどたんけん しよう。	⑤集団に適応し共に生きる力	
(13)(14)(15)(16)(17) 「すてきパフレット」を 作ろう。	⑥家族と共に生きる力	
(18) わたしたちの町のことを もっとみんなに知らせよ う。	⑦自らの意志と責任で判断する力	よりよく判断する力(意志決定能力)
	⑧自らが考え選択する力	
	⑨自らの課題を見つけ解決する力	
	⑩情報を収集し探索する力	情報を集め活用する力(情報活用能力)
	⑪職業について理解する力	
	⑫情報技術を活用する力	
	⑬自分の社会的役割を認識する力	自己の夢をつくりあげる力(自己理解・将来設計能力)
	⑭計画を企画し実行する力	
	⑮心理的な自己自立を図る力	
	⑯社会的な自己自立を図る力	
	⑰意欲的に学ぼうとする力	

図3-1 生活科の学習計画と「5領域17の力」との関連

この単元では、『共生』の観点である【④地域と共に生きる力】をつけるというだけでなく、探検活動の計画・準備をするという要素を取り入れることにより、『自立』の観点である【⑭計画を企画し実行する力】もつけたいと考えた。あらかじめ決められた施設やお店をクラス全員で見学に行くという学習活動だけでは、自立的な判断や準備をする意欲が高まらなないと考えたからである。

このような表を作成することは、学習計画を立案する際に、「5領域17の力」が極端な偏りなく学

習計画に組み込まれているか、どの時間にどのような力を意識して学習活動を展開すればいいのかということをもとめ確認することができ、大変便利であった。

(2) 子どもの姿から

ア) 本時の様子について

本時(10/18時間目)は、グループのみんなで町探検(パートⅡ)に行くための計画を立てる学習の時間である。

まず、話し合う内容である「何を、だれがインタビューをするのか」「何を持って行くのか」「グループの約束はどうするのか」の3点について、全体で確認をした。インタビューの項目数はグループの人数分とし、当日、1人1項目のインタビューをすることをあらかじめ子どもたちに伝えた。人任せにするのではなく、主体的に話し合い活動に参加できると考えたからである。

次に、話し合い活動を行った。図3-2は、どのような質問の内容をインタビューするか、グループで話し合いをしている様子である。あらかじめ各



図3-2 グループでの話し合い
自分で考えていた質問を持ち寄り、精選して人数分に絞り込み、誰がどの質問をするのか役割分担をした。また、当日の持ち物や約束事を決めた。

話し合いを終えたグループは、インタビューの練習を始めた。図3-3は、お店の方の役をした指導者を相手に、インタビューの練



図3-3 インタビューの練習

習をしている様子である。インタビュー活動の経験がほとんどないという子どもたちであったため、本時は、インタビューをするために準備したメモを読むことで精一杯であったが、国語の音読発表会の経験から、「大きな声で、ゆっくりと話したほうがいいよ。」「最初のあいさつと最後のお礼はみんなでしょう。」というアドバイスを友だち同士で始めるグループもあった。

全体での学習の振り返りでは、「考えてきた質問を自分でインタビューできることになって、す

ごくうれしい。」という満足感を表す子どもや、「お店の人の顔を見てインタビューできるように、覚えるくらい家で練習しようと思う。」といった次の目標を立てることができた子どもがいた。

なお、この単元の本時の目標・展開については、第2章の第1節2項に掲載している。

イ) 単元の様子について

以下に示したものは、単元の全学習を終えた子どもたちの感想の一部である。

- ・行きたいお店にたんけんに行けてよかった。お店の人は、やさしくおしえてくれたよ。
- ・さいしょ、インタビューをするのはドキドキするだろうと思ったけど、みんなとれんしゅうしたからだいじょうぶだった。
- ・はじめてわかったことがたくさんあったよ。こんどはちがうところにたんけんに行ってみたい。自分たちでまたけいかくを立てて、見たり聞いたりしたいな。

これらの感想からもうかがえるように、自分で探検してみたい場所を選んで決めるという自立的な判断をする場や計画を立てて準備する場を設定することにより、見通しをもって学習することの楽しさや大切さを子どもたちは実感することができたと考えられる。

ウ) 相談活動について

探検してみたい場所を決める場面では、次のような相談活動が行われた。

- A児：先生、わたし、探検してみたいところが見つからない。
- T：この前、家族でおいしい中華料理屋さんに行きに行ったときの話をしてくれましたね。探検して、そのことをみんなに教えてあげたらどうですか。
- A児：うん。お店の場所はわたししか知らんし、友だちを連れて行ってあげたい。なんでおいしいのかな。どんな人が料理を作っているのか見てみたい。みんなが知らない秘密も聞いてみたいなあ。(以下、略)

学習時間内に、探検したい場所を決めることができなかったA児との相談活動は、放課後、個別に行われた。指導者はその子の生活体験を、日記や普段の会話などから事前に把握しておき、興味や思考が膨らみそうな話題を相談活動で提供した。自分の経験を想起させるような、支援となる言葉かけをしたことにより、子どもの困っていることが解消され、学習への意欲が高まったと考えられる。

この後、A児は、質問したいこともワークシートに書くことができた。

エ) 評価活動について

毎時間、学習の終わりに振り返りの時間を設定し、「ふりかえりカード」の学習に対する満足度を示すマークに色を塗り、「がんばったこと・今度やってみたいこと」を記述するようにした。

図3-4は、第2学年生活科の「ふりかえりカード」の一例である。

日にち	学しゅうのめあて	まんぞくマーク	がんばったこと・こんどやってみたいこと
6/ ()	①町にはどんなものがあるのか、していることをはっぴょうしよう	😊 😐 😞	いっぱいはっぴょうできてうれしかった。
6/ ()	②③みんなて町をたんけんし、お気に入りを見つけよう(1)	😊 😐 😞	いろんなおみせが見つけれられたからおもしろかった。
/ ()	④⑤みんなて町をたんけんし、お気に入りを見つけよう(2)	😊 😐 😞	ちよつとだけつかれたけどみんなで行くとたのしかった。
/ ()	⑥⑦町をたんけんして見つけたものをしらせよう	😊 😐 😞	ちよつとおもいだせなかった。
/ ()	⑧町をたんけんして、ふしぎだな・もっと知りたいなど思ったことを出し合おう	😊 😐 😞	じどうかんの中が見たかった。ふしぎなことがわからなかった。
/ ()	⑨町たんけん(パート2)で行きたいところをきめよう	😊 😐 😞	きめるとき、まよったけれど、ちゃんときめられた。グループがきまってくれたい。
/ ()	⑩グループで、「しつもんすること」と「しつもんのかた」をかんがえよう	😊 😐 😞	こんど、おみせにいったら、かおを見てはなせばいいのかなってきつたい。
/ ()	⑪⑫町たんけん(パート2)に出かけ、インタビューしてみよう	😊 😐 😞	さいしょはドキドキしたけれど、まらがえすにいえよよかった。たのしかった。
/ ()	⑬町たんけん(パート2)でわかったことを、どのようにしらせるか考えよう	😊 😐 😞	町たんけんしんぶんに絵をかきたい。みんながしらないことをかいてみたい。
/ ()	⑭⑮わかったことをまとめよう	😊 😐 😞	たんけんメモを見たから、おみせにうづついたものをたくさんかいたよ。

図3-4 第2学年生活科「ふりかえりカード」の一例

単元の初めのころは、振り返りの記述をする際、文字を書くのに時間がかかったり、何を書けばいいのかわからなかったりする子どもがいたが、回数を重ねるごとに、短時間で振り返りができるようになった。また、次時はこれをやりたいという目標をもつことができるようになった子どもが増えていった。低学年の時期からこのような経験を積み重ねることは、自己評価能力を高める上で有効であると思われる。

「自分のめあてをつくる」ことについては、経験が少なかったため、最初は学習のねらいをそのまま活用し、自分のめあてとすることにした。そして、単元の学習を進める中で、徐々に自分の学習活動に応じためあてを設定できるようにしていった。9時間目からは、学習の流れを確認した後、「今日の学習で特にがんばろうと思っている

ことを教えてください。」という指導者の言葉かけにより、自分だけのめあてを設定する活動を取り入れた。単元の終盤には、「インタビューで教えていただいたことをよく聞き、きちんとメモする。」「F中学校で発見したことを、大きな声でみんなに発表する。」といった自分だけのめあてを、多くの子どもが設定できるようになった。毎時間、学習の終わりに振り返りの時間を設けることにより、自分は次時の学習で何をしなければいけないのか、がんばることは何なのかといった具体的な次の学習のめあてを明確にすることができたと考えられる。

また、子どもが、各自の学習ファイルに振り返りカードを綴じておくことにより、どのような活動をしてきたのかという学習のあしあとがひとめでわかり、単元全体を振り返る際にも大変参考になる資料となった。

第2節 第4学年「道徳」特別活動 ～働くことや目標・希望をもつことの 大切さについて考える取組～

(1) 実践授業での工夫

道徳「みんなのために役に立つ喜び」の主題名及びねらいは、以下のとおりである。

主題名：4-(2)働くことの大切さ
ねらい：大人はなぜ働くのか考え、話し合うことを通して、働くことの大切さに気付く、みんなのために役に立とうとする態度を養う。

また、学級活動「十歳を祝おう(1/2成人式)」(全8時間)のねらいは、以下のとおりである。

自分について考え、未来への願いや思いをもつ。

ア) 学習計画について

第4学年の社会科「安全な暮らしを守る」では、消防署や警察署などの様子を見学したり調べたりすることを通して、人々の暮らしを守るための仕事について学習する。安全を守るために働く地域の人の仕事や工夫、努力について考えることにより、仕事をする大人に対して、「すごいな」「カッコいいな」といったあこがれを子どもたちは抱くであろう。

この学習を終えた後、あこがれを具現化していくためには、「何のために大人は働くのか」「働くとはいったいどういうことなのか」ということを子どもたちが考える必要がある。「大人の義務だ

から働く」というのではなく、社会は様々な仕事によって成り立っていることや、人は支え合って生きていることなどを理解し、さらに、「勤労観」や「生き方」について立ち止まって考える絶好の機会ではないかと考えたのである。

そこで、「心のノート」を活用し、「働くことの大切さ」を学習する計画を立て、他教科の学習と関連づけて、「なぜ働くのかを考える」という道徳の学習内容を補うことにした。

図3-5は、道徳の構想図である。

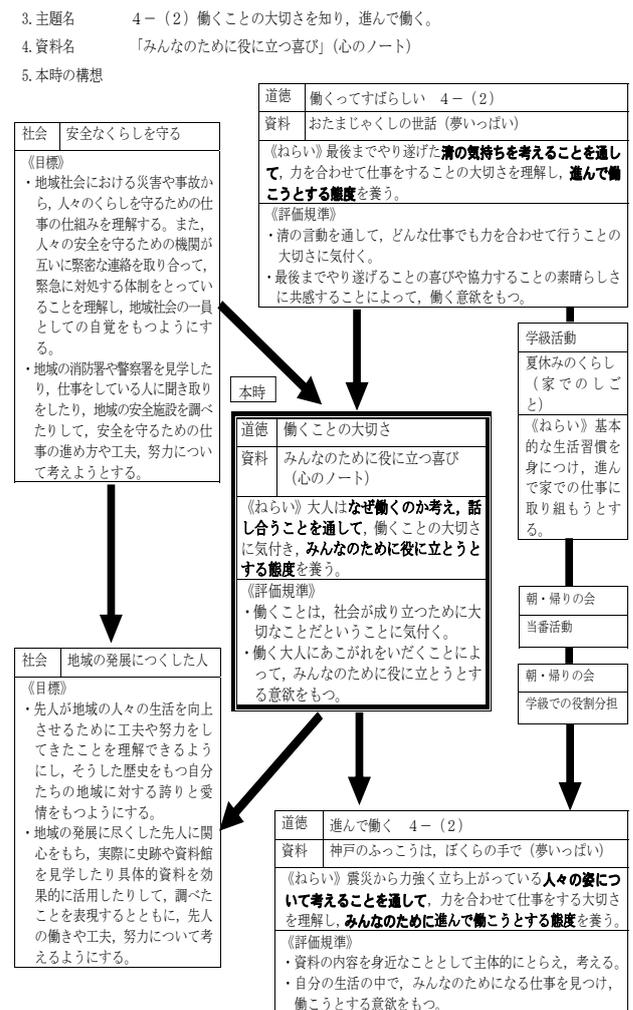


図3-5 他教科等との関連を意識した道徳の構想図

社会科での学習を基に、働くことの大切さに気づくことは、「自己の夢をつくりあげる力」をはぐくむ要素である「規範意識を高めること」や「自己有用感をもつこと」につながる。また、みんなのために役に立とうとする態度を養い、自分のできることは何なのか考えることは、あこがれを具現化の上での「目的・目標の設定をすること」につながる。

中学年の《めざす子どもの姿》である、「目標

に向かって、今やるべきことを理解する。」という
ことを踏まえ、これらの要素を含んだ教育活動を
展開することは、働くことの大切さに気づくと同
時に、将来の見通しをもって行動するために、自
分は今何ができるのか、何をすべきなのかを考
える学習となると思われる。

また、社会科や道徳の学習内容を踏まえ、特別
活動の時間に、今までの成長を喜び、10才である今
の自分を見つめ、どのような大人になりたいかを
みんなに伝える「10才を祝おう」という学習を設
定することにした。

図3-6は、特別活動の活動計画である。

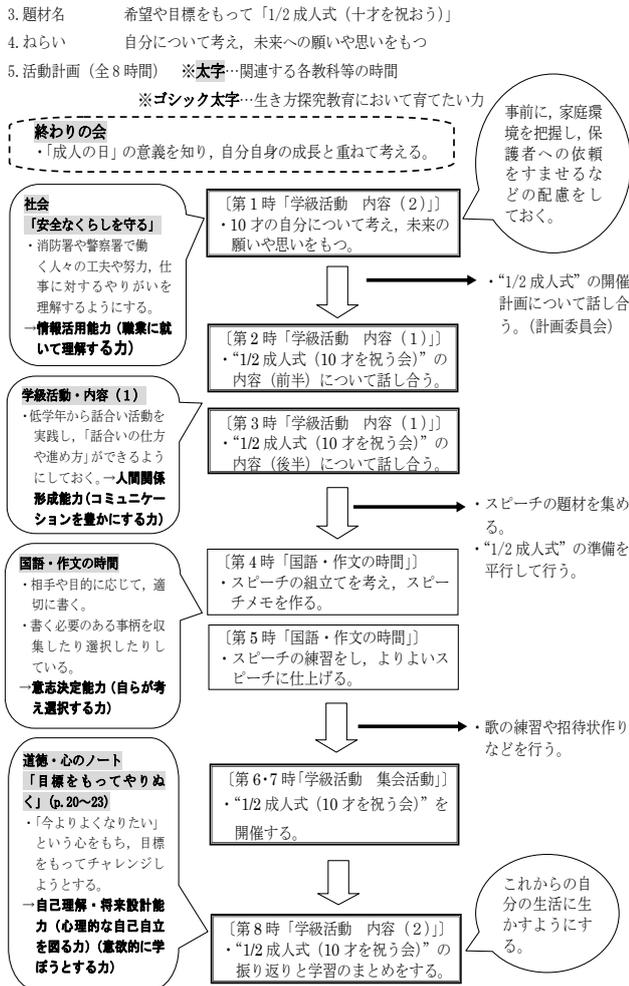


図3-6 他教科等との関連を意識した特別活動の活動計画

この学習では、自己理解を深め、将来の夢や希望をもつというねらいがある。そこで、身体の発育だけでなく、家族や友だち、地域社会の人たちとのかかわりの中で培われてきた、心の成長をも振り返り、お互いの成長を祝おうと考えた。

イ) 育てたい力との関連について

図3-7は、道徳および学級活動の学習計画と、

生き方探究教育において育てたい力「5領域17の力」の関連を示したものである。

～第4学年 道徳「みんなのために役に立つよこび」 学級活動「十歳を祝おう（1/2成人式）」～

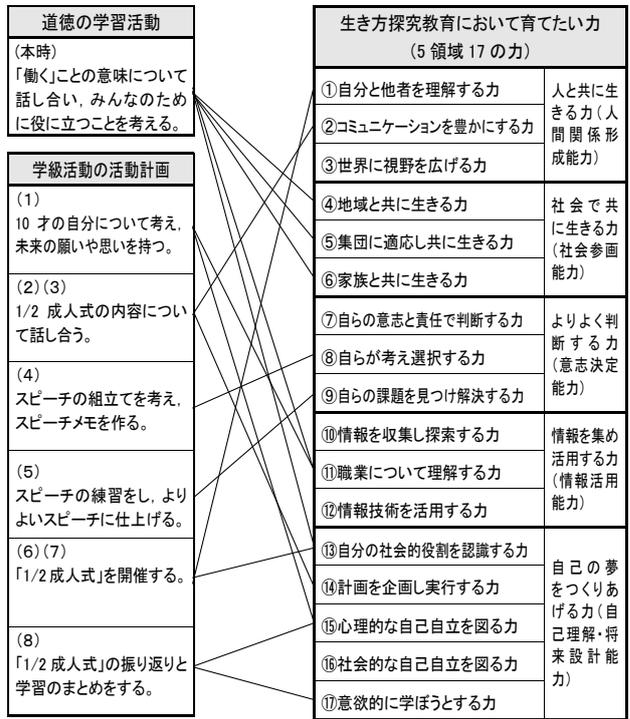


図3-7 第4学年道徳および学級活動の学習計画と「5領域17の力」との関連

道徳では、働くことの意義など、仕事について理解する力を育てるだけでなく、人や社会と共に生きる中で、自分にはどのような役割があるのか、何ができるのかを考えることが大切であると考えた。働くことの大切さやだれかのために役に立つことの喜びを感じ、「自己有用感を高める」という要素を取り入れた学習活動が展開できると考えたからである。

また、社会科で学習した身近で働く人たちの様子や考え方を思い出し、働く人に対するあこがれや素敵だなと思うところを見つけることで、「自分もこんな大人になりたい」という将来像を描くことにもつながると考えた。

道徳の学習を終え、学級や地域、家庭で役に立つことやお手伝いなどを始めた子どもがあれば、発表の機会を設けることにより、「みんなの役に立ってよかった」という満足感・成就感を伴う成功体験となることも期待している。

一方、学級活動では、“1/2成人式”の「企画・役割分担・準備を自分たちで行う」という要素を取り入れることにより、計画の必要性に気づき、見通しをもって意欲的に学習活動に取り組むこと

ができると考えた。

また、国語科の学習と関連づけ、10年後の自分の目標を明確にして文章に書き、それをみんなに伝えることで、今の自分はどうかあるべきなのかをあらためて見つめ直し、今後の生活設計を組み立てるきっかけになると考えた。

(2) 子どもの姿から

ア) 本時の様子について

道徳の本時のねらいは、[大人はなぜ働くのかを考え、話し合うことを通して、働くことの大切さに気づき、みんなのために役に立とうとする態度を養う。]である。実践授業は、次のような流れで行った。

- ①大人はなぜ働くのか考え、意見交流する。
- ②大人はどのような願いをもって働いていたか思い出す。(社会科の学習などを思い出す。)
- ③働く人々の考え方・生き方の中で、あこがれるところや素敵だなあと思うところを発表する。
- ④学級や地域、家族のために自分ができていることを考え、ワークシートに書く。
- ⑤今日の学習を振り返る。

導入の場面では、「大人はなぜ働くのだろうか」という問いに対し、多くの子どもが、「お金をかせぐため」とワークシートに記入していた。その後の意見交流では、「生活していくため」「欲しいものを買ったり旅行に行ったりするため」「家族のため」「子どもを育てるため」という意見が見られた。自分や家族のために働くと考えた発言が多かった。

次に、指導者は「地域で働いている人や社会科で学習した働く人たちは、どんなことを願いながら仕事をしていたでしょう。」と問いかけた。すると、「商店街の人たちは、町の人たちが喜んでくれるようにと思って、品物を売っていた。」「警察の人は、地域の人たちが安全に、安心して暮らせるようにと思って、夜もパトロールしていた。」「生け花を教えてくださいました方は、やりがいや誇りをもって働いているとおっしゃっていた。」「お母さんは、お給料がもらえないのに、わたしたちが幸せに暮らせるようにと願って、家の仕事をしてくれている。」などの意見が出た。この場面では、社会科や総合的な学習の時間に学習したことを想起して、働く意味について考えることができた。

また、働く人に対するあこがれや素敵だと思うところについて、子どもたちは、「自分のことだけ

でなく、地域の人のことを考えて仕事をしているところがすごいと思った。」「危ない目に遭うかも知れないのに、仕事を一生懸命しているのがかっこいいと思う。』と、自分の考えを示した。働く人のモデルを示すことにより、大人は収入を得るためだけでなく、仕事に対する思いをそれぞれがもちながら働いているのだということが理解できたと思われる。

そこで、みんなのために、今の自分には何ができるだろうかということ各自で考えた。「地域のみんなが元気になれるように、“あいさつ大作戦”をしていきたい。」「クラスのみんなが優しい気持ちや笑顔になれるように、“はげましの言葉大作戦”をしよう。」「お母さんやお父さんの疲れが少しでも減るように、“お手伝い大作戦”をこれからも続ける。」といった取組をそれぞれ考えることができた。

図3-8は、道徳の学習の板書の様子である。



図3-8 道徳の学習の板書

また、以下に示したものは、本時の学習のまとめの場面での、子どもたちの感想の一部である。

- ・働くことで、だれかが喜んだり安心したり幸せになったりする。働くことは大切なことだな。
- ・みんなの考えを聞いていて、お金もうけはできないけれど、今の自分にもできそうなことがたくさんあることがわかった。
- ・これからも、だれかの役に立つことを続けて、喜んでもらいたいと思った。
- ・できることがだんだん増えてきた。それが成長だから、できることを重ねて大人に近づいていきたい。

これらの感想からもうかがえるように、働くことの意味を考え、「なりたい大人像」をはっきりさせた上で、そのような大人になるために、今何ができるのかを考えることは、みんなのために役に立とうとする意欲や、見通しをもって行動する力を高めることにつながった。

一方、特別活動の本時(1/8時間目)のねらいは、[10才の自分について考え、未来への願いや思

いをもつ。]である。本時の評価規準は、[今の自分を見つめながら、未来への思いを表現する。]とし、実践授業は、次のような流れで行った。

- ①これまでの自分を振り返り、成長してきた自分を見つめる。
- ②「10才」のもつ意味について考える。
- ③「大人」について考える。
- ④10年後の自分を想像しながら、未来への願いを書き表す。
- ⑤学習の振り返りをする。

導入の場面では、赤ちゃん人形を提示し、誕生のときの自分と今の自分との比較をして、どのような点で成長してきたのかを考えた。身体面、技能面、知識面などの目に見える部分の成長だけではなく、「友だちにやさしくすることができるようになってきた。」「幼いころに比べると、がまん強くなってきた。」など、心情面でも成長してきたことを振り返ることができた。ここでは、成長には個人差があるが、それぞれが様々な面で成長しているということを補足説明した。

次に、「10才」という年齢について考えた。事前学習で、成人式についてすでに調べてきていたため、「10才というのは、20才の半分だから、大人の半分」「大人になるまでの、ちょうど中間地点」ということがすぐに考えられたようである。

続いて、「大人」とはどのような人であるのか、考えた。驚いたことに、3クラスとも、「大人になると、働かなければならない。」という発言が最初に出てきた。事前に行った道徳や社会科の学習で学んだことが、子どもたちの思考に印象深く残っていたためだと思われる。「好きなものが買えるし、好きなことができる。」「車の運転ができる。」などの発言の他、「自分一人で生活しなければならない。」「結婚できる。そのかわり、子どもや家族のことを考えなければならない。」という発言もあった。「大人は子どもより自由である。」と考えていた子どもにとって、意見交流することにより、「大人になると、今まで以上にできることが増える一方、自分にかかる責任も大きくなる。」ということが理解できたようである。

そこで、20才になると、どのような進路を考えたことができるか、簡単な表に示し、将来の自分像を少しでも具体的にとらえることができるようにした。この表を見た子どもたちは、「20才という年齢の人は、全員が働いているというわけではないんだなあ。」「学校に進んで勉強したり、資格を取ったりするなど、仕事を始めるまでにいろいろ

な道があるということがわかった。」「少しでも早く働きたいと思っていただけど、ぼくがなりたい職業に就くためには、高等学校に行って勉強した方がいいと思った。」「勉強は嫌いだけど、なりたい仕事について勉強するのは楽しみだなあ。」などの感想をもった。

図3-9は、小・中学校卒業後、様々な職業に就くために、どのような進学先や進路が考えられるのか、一例を示した表を使って、中学卒業後には多様な進路選択があることを確かめている様子である。



図3-9 進路選択を確かめる様子

表を提示したことは、将来の夢やあこがれをもつことの大切さがわかるだけでなく、なりたい自分に近づくために、今、そして近い将来、何をすべきなのかを考えるよききっかけになった。

図3-10は、今回の実践授業で使用した、小・中学校卒業後の進路表を拡大したものである。



図3-10 小・中学校卒業後の進路表

次に、今まで話し合ったことを受け、自分自身の生き方について見つめ直す場面を設定した。今までの自分のがんばりや、もっと成長したいと思う部分を振り返り、10年後の自分は、どのような大人になっていたのかを考え、各自、ワークシートに書き表すという活動を行った。この場面で描く「こんな大人になりたい」という将来像は、「1/2成人式」で発表する、10才の自分への手紙文の原案となるため、できるだけ具体的に将来像が描けるようにしたいと考えた。

この後、20才の大人になった自分を想像しながら、未来への願いをワークシートに書き表した。就きたい職業が明らかな子どもには、なぜそう考えているのか、また、その職業に就いてどうなりたいたのかを、できるだけ具体的に書くように助言

した。以下に示したものは、子どもが本時に書いた将来像の一例である。

- ・高校に行って、甲子園に出て、そのあとプロ野球の選手になりたい。打つのも走るのもすごい、人気のある選手になりたい。
- ・仕事は決めていないけど、だれかの役に立つことをしたいし、やさしい人になりたい。

授業が始まる前には、将来の夢をもっているか尋ねたところ、「夢なんかない。」「やりたいことが見つからない。」と答えた子どもが半数近くいた。しかし、授業の後半には、自分が興味のあることや将来の夢を、楽しそうに話してくれる子どもの姿が見られた。授業の終わりには、ほとんどの子どもが、20才になったときの自分の姿をワークシートに書き表すことができた。

今までの成長を振り返り、自分を見つめ直して未来の自分に思いを馳せるという活動を設定したことにより、なりたい職業に限らず、こういう大人になりたいという将来像を描くことができたと思われる。

イ) 単元の様子について

2・3時間目には、“1/2成人式”の企画・準備を自分たちで行った。プログラムや役割分担、みんなで歌う式にふさわしい曲、一人一人の発表のときに今までの成長がみんなに伝わるようにするための演出などについて話し合い、計画を立てた。

4・5時間目には、国語科と関連づけて10年後の自分へ手紙を書く活動を取り入れた。書いた手紙を“1/2成人式”で発表することを通して、国語科の「書くこと」や「話すこと・聞くこと」といった言語活動で培ってきた力をこの学習で生かしたいと考えたのである。そこで、発表の機会が必要であると考え、式は一日参観日に設定した。友だちだけではなく、家族の方々にも今の思いを伝えようという目的意識をはっきりさせ、かかわりのある人への感謝の気持ちとともに、「10年後はこんな自分になりたい」という自分の思いを明確にした文章を書くことができた。

6・7時間目には、その手紙を持ち寄り、自分たちで企画・準備した“1/2成人式”を開催した。

右に示したものは、1時間目(1/8時間目)のワークシートに、「福祉の仕事をしたい。お年よりや困っている人に元気をあげたいな。だから、専門学校に進んで勉強したい。」と書いていたB児が、後日、10年後の自分へ書いた手紙文の一部である。

(略)今の私は、みんなの前で発表できるようになったり、代表委員になったりしています。でも、時々友達とけんかをしたり、きつく言ったりしまったりします。そんなとき、仲良くしてくれている友達がやさしく助けてくれます。

私は夢をもっています。それは、高校からせんもん学校に行って「かんごし」になることです。なぜなりたいかという、病院にはしんどくて苦しんでいる人がたくさんいるから、そんな人を助けたいのです。

今、あなたは元気ですか？ かんごしさんになれていますか？ ゆめはかわっているかもしれないけれど、小さいころの自分を思い出して、やさしい人になっていてください。「人を助けたい」という気持ちをわすれないでくださいね。わたしもやさしい人になれるようにがんばります。

〇〇〇より

この文からうかがえるように、1時間目で思い描いた10年後の自分のイメージが基となり、以後の学習で、長所や短所を含めたありのままの自分を見つめ直すことができた。また、自分の将来像や具体的な夢・希望を、“1/2成人式”で発表することができた。

図3-11は、子どもたちが“1/2成人式”の司会進行をしている様子である。また、図3-12は、10年後の自分への手紙を式で発表している様子である。



図3-11 “1/2成人式”の司会進行

さらに、自己理解だけではなく、自分とつながりがある人に対する理解を深めることも大切にしたいと考えた。そこで、事前に保護者に協力を求め、子どもへのお祝いメッセージの手紙を書いていただくことにした。そして、式の最後に家族からの手紙を読む時間を設定した。自分に対する家族の思いを知ることを通して、自分の存在についてあらためて考えることができた。

図3-13は、式の最後に家族からのお祝いメッセージを読んでいる様子である。



図3-12 書いた手紙文を発表する



図3-13 家族からの手紙を読む

さらに、単元の最後の8時間目には、「1/2成人式」での学びを振り返った。子どもたちは満足した様子で、「がんばって発表できてよかった。」「家の人が、涙が出るくらい感動したよってほめてくれてうれしかった。」と感想を発表した。

これらの取組は、今の自分の在り方を見つめ、目標や希望をもつことの大切さについて考えることにつながった。また、道徳と同様に特別活動でも、他教科等との関連を意識して横断的な学習を進めることは、自分の在り方や将来像を考える上で、大変有意義であり効果的であった。

ウ) 相談活動について

「ぼくは夢が見つからない。」と話していたC児は、指導者と得意なことや関心のあることについて話を進める中、調理に興味があるという理由から、「大人になったら、料理人になれたらいいな。理由は、お母さんが喜んでくれると思うから。」と、自分の夢をワークシートに書き表した。

ところが、全体の前で発表する場になって、C児は話せなくなってしまった。そこで指導者は、再び子どものそばに行き、「この前、日記に夕飯のお手伝い大作戦をしたって書いていましたね。みんながおいしいって言ってくれる食事が作れるんだから、大人になったら、きっと立派な料理人になれると思いますよ。」と言葉かけをした。C児はほっとした様子で、書いた文章を読み始めることができた。指導者は、C児の思いが全員に伝わるよう、聞き取りにくい部分は復唱したり、補足したりするなどの援助を行った。

図3-14は、10年後の自分像を発表する場面で、指導者が子どもの発表への援助を行っている様子である。



図3-14 発表場面での相談活動

このように、自分が抱いた将来の夢をみんなに伝えるという場面で、うまく表現活動ができない子どもに対し、個別にかかわり、適切な相談活動を行うことは、安心し、自信をもって自分の思いを表現することに大変有効であった。

エ) 評価活動について

第2学年生活科と同様に、特別活動では毎時間、自分のめあての設定と学習の振り返りを行った。第4学年でも、振り返りカードを活用することは、学習の終わりの振り返りを次時の目標設定

に生かすという点で、大変有効であった。

図3-15は、特別活動の振り返りカードの一例である。

～ 振り返りカード № 1 ～

1/2成人式 ～10才を祝おう!～

4年 組 ()

※ 学習のはじめに、自分のめあてを決めよう。(学習のめあてや前時の感想を参考にしよう)
 ※ 学習の終わりに、その時間の満足度と感想を記入しよう。

日にち	自分のめあて	満足度は?	感想(反省点は次に生かそう)
/ ()	①どんな大人になりたいか考える。	とても まあまあ あまり <input type="radio"/> <input checked="" type="radio"/> <input type="radio"/>	いろんなことで成長してきたことがわかった。どんな大人になりたいか、考えられた。
/ ()	②“1/2成人式”でどんな出し物をしたか考える。	とても まあまあ あまり <input type="radio"/> <input checked="" type="radio"/> <input type="radio"/>	“1/2成人式”がとても楽しみです。思い出の替え歌を作るのが楽しみです。
/ ()	③プログラムの順番を考え、どんな係が必要か考える。	とても まあまあ あまり <input checked="" type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/>	歌のぼんそう係になったから、まらがないようにしたい。
/ ()	④10年後の自分に手紙を書く。	とても まあまあ あまり <input type="radio"/> <input checked="" type="radio"/> <input type="radio"/>	自分のいいところとよくないところを考えるのがむずかかった。
/ ()	⑤気持ちよこめて手紙を読めるように練習する。	とても まあまあ あまり <input type="radio"/> <input checked="" type="radio"/> <input type="radio"/>	ときどきまらがるので、ゆつくりとよびかけるように発表したい。
/ ()	⑥⑦心に残る“1/2成人式”になるように、手紙の発表をがんばる。オルガンのぼんそうをまらがないようにする。	とても まあまあ あまり <input checked="" type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/>	すぐきんちょうしたけど、ちやんと発表できてよかった。お母さんからの手紙がとてもうれしかった。一生の宝物にしたいなあと思った。
/ ()	⑧“1/2成人式”で思ったことをたくさん発表する。	とても まあまあ あまり <input type="radio"/> <input checked="" type="radio"/> <input type="radio"/>	あんまり発表できなかった。でも、これから夢がかなうようにがんばろうと思った。

図3-15 第4学年特別活動「振り返りカード」の一例

“1/2成人式”終了後に、子どもから「お家の人に、お祝いメッセージのお礼を書きたい。」という提案が出たので、返事の手紙を書くことにした。下に示したものは、お家の方からのお祝いメッセージに対して書いた返事の一部である。

・お手紙ありがとうございます。“1/2成人式”にも来てくれて、とてもうれしかったです。小さいころのことはぜんぜん覚えてないけど、わたしはたくさんの人にかわいがってもらっていたんだなと思いました。今はピアノもむずかしくなってきたけど、練習して大人になったら上手にひけるようになりたいからおうえんしてくださいね。これからも、きびしくやさしくしてください。

・私もママのところに生まれてきてすぐうれしかったです。2才でパパが天国に行っちゃって悲しかったけれど、今はママがいっしょでとてもうれしい。ありがとうの気持ちを大切にしたいです。10年たっても、もっともっとたっても、仲良くけんかしないようにしようね。育ててくれた感謝の気持ちは、一生わすれません。

・パパとママへ。大人になったら仕事がんばるよ。これからも、弟と妹の世話をがんばる。家のこともがんばる。(中略)いつもたいへんやけど、楽しいです。いつもおこらしてばかりでごめんなさい。ありがとう。

これらの返事から、「1/2成人式」を終えたとき、「自分たちで作り上げた式が成功してよかった」という思いをもつとともに、今までの成長は、自分を支えてくれる多くの人たちがいたからだという、他者への感謝の気持ちを再確認することができたと思われる。学習を通して、自分の思いや考え方がどのように変わったのかということ「手紙の返事」という形で表現したことにより、評価活動につなげることができた。

また、保護者からは、「今の子どもは将来の夢を抱けないと思っていたけれど、どの子どももしっかりとした大きな夢をもっていて、うれしく思いました。いろいろな人たちのおかげでここまで成長してきたことや感謝の気持ちを忘れないで、大人になって欲しいです。」という感想が寄せられた。

このように、保護者から、子どもたちとのやりとりを通してプラスの評価をしてもらうことにより、子どもの自己肯定感が高まった。また、夢の実現に向けて、前向きに努力しようという意欲につながった。

第3節 第6学年「総合的な学習の時間」

～夢の実現のために計画を立て、

将来について語り合う取組～

(1) 実践授業での工夫

総合的な学習の時間「ぼくら生き方探検隊！～T保育園に行こう～」（全20時間）の単元の目標は、以下のとおりである。

様々なふれあいや体験活動を通して、課題の解決を探ったり、計画・実行したりし、働くことの意味や自分の生き方について考える。

ア) 学習計画について

本単元は、T保育園児との交流を通して、「共に生きる」、つまり『共生』とはどういうことなのかを考え、周りの人とのかかわりや自分自身を見つめ直すという学習を、年度当初、計画していた。小さい子どもたちの立場に立って、活動を計画したり、その場の状況を判断し修正したりしながら、よりよいかかわり方を考えることによって、思いやりの心を育てたいと考えたのである。

C校第6学年の子どもたちは、学年の枠を超えた異年齢集団での活動に、意欲的に取り組んでいる。集団登校をはじめ、掃除・給食交流、縦割り遊び、秋の全校縦割り遠足など、グループのリーダーとなる機会が多い中で、どの子ども、下級生に

対して優しく接することができる。しかし、遊びなどの活動計画の立て方については個人差がある。そこで、様々な経験を積み、計画を企画し実行する力をつけていく必要があると思われる。

これらの実態を受け、小さい子どもに対する思いやりの心をさらに育てるだけでなく、最高学年として、学校をリードするために必要な見通しのある計画力、それらを実践する力を育てていきたいという願いが指導者にあった。

また、高学年の《めざす子どもの姿》を、「将来のことを考え、夢に向かって努力する。」と設定した。このことから、自分より年下の子どもとのかかわりだけでなく、地域の大人の方とのかかわりの中から、生き方について学ぶことはできないだろうかと考えた。そこで、子どもの実態と指導者の願いを踏まえ、学習計画を立案することにした。

イ) 育てたい力との関連について

図3-16は、総合的な学習の時間の学習計画と、生き方探究教育において育てたい力「5領域17の力」の関連を示したものである。

～第6学年 総合的な学習の時間「ぼくら 生き方探検隊！」～

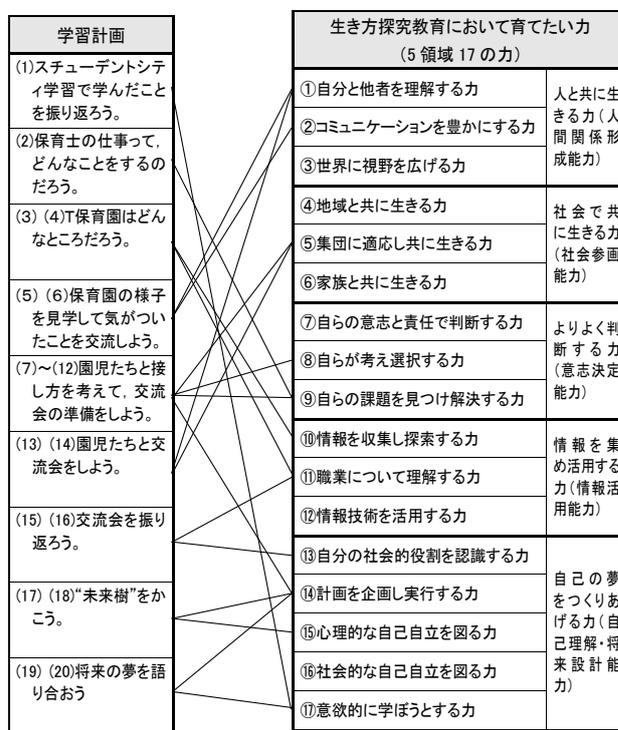


図3-16 第6学年総合的な学習の時間の学習計画と「5領域17の力」との関連

この単元では、保育士体験において、園児の喜びが自分の喜びとなるとき、『共生』の観点である、人と共に生きるということを体感できると考

えた。また、互いの役割が次の活動にどのようにつながっていくかを把握し、自分の役割や仕事を果たそうとすることや、見通しをもって活動計画を立て、めあてをもって実行していこうとすることにより、見通しをもち、行動するという力を育てたいと考えた。

さらに、夢や希望を書き表し、友だちと語り合うという活動を通して、『自立』の観点である、将来を設計する力がはぐくまれると考えた。

(2) 子どもの姿から

ア) 本時の様子について

本時(17・18/20時間目)の目標は、[今まで学んできたことをもとに、将来の夢やなりたい自分について書き表し、自分の将来について、おおまかな計画を立てることができる。]である。実践授業は1コマ90分間とし、次のような流れで行った。

- ①保育士体験で学んだことを思い出す。
- ②自分の夢を描く“未来樹”の書き方を知る。
- ③将来の夢や希望を“未来樹”に書き表す。
- ④1年後や10年後の自分はどのような姿なのか、将来設計を考える。
- ⑤グループの友だちと交流する。
- ⑥今日の学習を振り返る。

まず、今回の保育士体験でどのようなことを学んだのか、振り返りカードなどを参考にしながら思い出した。下に示したものは、体験学習を終えた子どもの感想の一部である。

- ・園児たちと仲良くなれたし、小さい子どもってかわいいなと思った。自分たちが計画した遊びで園児が楽しんでくれると、自分もうれしくなった。
- ・どんな仕事も大変だけど、子どもを相手にする仕事は、相手がすごく喜んでくれているのがわかるし、やりがいがあると思った。
- ・うまくいかなかったところもあったけど、自分たちで考えて修正できたと思う。そんな部分を保育士さんがほめてくれて、うれしかった。
- ・今までなら、いっしょに遊んであげればいいと思っていたけど、保育士さんの立場になって、どの子も楽しんでくれるように考えるということは簡単ではなかった。今回の保育士体験は甘さがなく、真剣に取り組めたと思う。
- ・りっぱな保育士さんになるために、いつも園児たちのことを考え、準備しなければならないということがわかった。大変だと思うけど、私も、なりたい仕事につけるように、がんばっていきたい。

これらの感想からもうかがえるように、子どもたちは、満足感・成就感を伴う職業体験をしたことにより、仕事に対する理解を深めることができた。また、めあてをもち、計画・実行することの大切さや、役割や責任を果たすことの大切さが実感できたと思われる。さらに、保育士の方が、「いい先生になりたい」という夢をもち続け、今も努力されていることを知り、夢やあこがれをもつことの大切さ、そして、その夢を実現するために努力し続けることの大切さも感じることもできたと思われる。

そこで、自分の将来の夢や希望は何なのかを考え、「未来樹(みらいじゅ)」という形で書き表すことにした。“未来樹”の描き方については、『10歳からの夢をかなえるノート』(41)を参考にし、作成した。図3-17は、作業の手順を説明する際に掲示した、“未来樹”の描き方の例である。



図3-17 “未来樹”の描き方の例

補足説明として、夢やあこがれは、この先変わってもかまわないということ、そして、「夢は叶わないかもしれない」と諦めるのではなく、「夢は叶うかもしれない」と肯定的に考えることが大切であることを子どもに伝えた。

子どもたちは、これまでの学習で書き溜めた行事の振り返り作文や日記などを見ながら、自分の成長を見つめ直し、将来の夢やあこがれ、そして、将来設計を書き表していった。言葉や文で書く子もいれば、絵や図を補足して描き表している子もいた。作業時間に個人差はあったが、どの子も黙って自分と向き合い、夢の設計図である“未来樹”を完成させていった。

まとめの場面では、グループ内で交流を行い、感想やアドバイスを伝え合った。そして、次時に、友だちからの励ましの言葉を書いてもらうことを子どもたちに予告し、授業は終わった。

“未来樹”の描き方について子どもたちに説明したことを以下に示す。

“未来樹”の描き方

～だまって、自分をみつめてみよう～

- ①自分の夢やあこがれを、木の中心にかく。
※「大人になったら…」という遠い未来の姿でも、「こんな中学生になりたい」という近い未来の姿でもかまいません。
※職業でも、あこがれの姿でもかまいません。
- ②「好きなこと」「感動したこと」「興味があること」を、地皮下にかく。
※自分自身のことや自分の将来を考えていく上で、基盤となるものです。
今までの自分をじっくり振り返ってみましょう。
- ③「こんな人になりたい」「こんなことにチャレンジしたい」「こんな社会にしたい」と考えていることを、枝をのびしてかく。
※「これは無理だ」とあきらめてしまうのではなく、「できるかもしれない」という希望をふくらませましょう。
- ④「1年後の自分の姿」「10年後の自分の姿」を木の幹にかく。
※1年後は、13歳。中学1年生です。
※10年後は、22歳。学校を卒業し、社会に出る年齢です。
- ⑤友達に、「はげましの言葉」をかいてもらう。
※友達からの言葉によって、元気と希望がわいています。友達にも、はげましの言葉をかけてあげましょう。
- ⑥お家の人や先生から、「はげましの言葉」をもらう。
※たくさんのはげましのことをもらうことによって、“未来樹”は大きく成長します。

今の自分をみつめ、どんな自分になりたいか考え、
そうなるように努力することが大切なのです。

書き上げた“未来樹”を見て、「これをずっと大切に残しておいて、夢を諦めそうになったときに取り出して見てみたい。そうしたら、くじけないでがんばれそうだから。」と話していた子どもがいた。夢を思い描くだけでなく、書き表して残すことにより、いつでも、何度でも、“未来樹”をかいたときの希望に満ちた自分を思い出すことができる。過去の自分からも励まされ、前向きに努力しようという意欲をもち続けることができるのではないかと思われる。

イ) 単元の様子について

T保育園に行く目的を、「園児たちと仲良くなるため」だけではなく、「保育園で働く、保育士の方たちの仕事を学ぶため」に変更した。自分の将来について考えるには、モデルとなる大人の姿を見て学ぶことが大切だと考えたからである。

働くという経験をするために、全員が保育士体験をさせていただくことにした。活動の内容は、園児たちに楽しんでもらえるように、40分間の“な

かよし会”を企画するというものである。

そこで、単元の最初(1/20時間目)に、今までの職業体験で学んだことを振り返ることにした。C校の子どもたちは、第5学年のときに、スチューデントシティ学習を通して職業体験をしている。また、事前・事後学習では、銀行員の方や旅行会社の営業担当の方から「働くことの意味」についてのお話をうかがったこともある。これらの学習を思い出し、学んだことを今までの生活にどう生かしてきたかを振り返る必要があると考えた。

2時間目には、保育士の仕事とはどのようなものかを考え、3・4時間目にT保育園の見学に行くことにした。設備・園児の様子だけでなく、保育士の方がどのような様子で仕事をされているのか、どのように園児たちとかかわっておられるのかを見学し、仕事の様子や仕事に対する思いを感じられるようにしたいと考えたからである。

5・6時間目に、見学でわかったことを交流し、7～12時間目に保育士体験の準備をした。子どもたちの希望に基づき、年齢別クラスに分かれ、園児の実態に応じた活動計画書を作成した。各グループとも、年齢に応じた絵本や紙芝居などの読み聞かせを必ず取り入れ、その他に2つの遊びやゲームを考えることにした。図3-18は、グループで、保育士体験の活動計画書を作成している様子である。活動計画書については、事前に保育士の方に見ていただき、アドバイスをもらって、2～3回の修正を加えた。



図3-18 グループで、活動計画書を作成する様子

活動計画書を作成した後、グループで“なかよし会”の準備を進めた。図3-19は、絵本の読み聞かせの練習をしている様子である。

1グループの構成を5～6人とすることにより、一人一人が責任をもって役割を担当し、意欲的に活動に取り組むことができ



図3-19 絵本を選び、読み聞かせの練習をする様子

ると考えた。役割分担を決め、年齢に応じた絵本や歌選び、遊びやゲームに必要なものの用意、ルー

ル説明の原稿作りなど、グループでアイデアを出し合い、協力して準備ができるようにした。

時間が限られていることから、時間配分を確認するための練習が必要となってくる。そこで、保育士体験前日には、安全面を考慮した場の設定なども含めて、リハーサルを行った。また、指導者は、事前にT保育園の先生方と、子どもの実態や安全面などについて、綿密な打ち合わせをしておくようにした。

図3-20は、5歳児クラスの“なかよし会”の活動計画書の一例である。

T 保育園と M 小学校6年			
交流会の活動計画書			
5歳児クラス		(メンバー)	
10月21日(水) 9:45~10:25			
時間	活動(遊び)	注意事項	担当・準備物
5分	自己紹介とあいさつ (M:小学校6年00000です。今日は楽しく過ごしたいと思います。よろしくおねがいします。)	・ ゆっくり大きな声で話す。 ・ 園児の顔を見て笑顔で話す。	担当
10分	① シェスナーゲーム (13問くらい) ① アンパンマンのトースト(ゴゴ)のゴ ② DAIGOのさくら(お山)のさくら ③ 本ちゃん(へんぎ) ④ ロボット(か)の ⑤ ボット	・ 園児に分かりやすいシェスナーを作る。 ・ 3チームに分けてする。 ・ 簡単なシェスナーにする。	担当 準備物 お山の言葉の紙
10分	② 読み聞かせ (大型絵本→紙芝居) (からものがら) (よびもの)	・ ゆっくり大きく(は)り、分かりやすく読む。 ・ 役になりきって楽しく読む。	担当 準備物 大型絵本 紙芝居
10分	③ ごっこ遊び(室内) (宝探(冒険)っこ) お宝を2人1組かくします。お宝を一人づつ見つけてもらいます。	・ かがみさせないようにする。	担当 準備物 宝(物)24)
5分	かたづけとお礼の言葉 (今日は「感想」だと思いましたが、ありがとうございました。)	・ みんなで協力してかたづけをする。 ・ 心に残ったことを簡単にまとめて話す。	担当

図3-20 “なかよし会”の活動計画書の一例

13・14時間目の保育士体験は、T保育園に出かけ、次のような流れで活動を行った。

- ① あいさつ (園庭にて)
- ② 園児のみなさんへ6年生から歌のプレゼント
- ③ 各クラスのお部屋で保育士体験 (40分間)
 - ・ あいさつと自己紹介
 - ・ 読み聞かせや遊び・ゲーム
 - ・ みんなで片付け
 - ・ あくしゅでさよなら
- ④ 教職員の方々にお礼とあいさつ (園庭にて)

図3-21は、0歳児クラスで保育士体験をしているグループの様子である。子どもたちは、保育士の方と同様にエプロンを身につけ、園児といっしょにリズム遊びをしている。



図3-21 0歳児クラスでの保育士体験

15・16時間目には、保育士体験について振り返りを行った。保育士の方に外部講師として来ていただき、子どもたちの感想交流の後、保育士体験について、保育の専門家の目から見た評価をいただくことにした。態度面だけではなく、保育の進め方や園児とのかかわり方などについても評価をいただくことにより、仕事の厳しさやコミュニケーションの大切さなどを学ぶことができると考えたからである。また、なぜ保育士という職業を選んだのか、「人とかかわる仕事」であるこの仕事でのやりがいや、特に気をつけていることは何なのかといったお話を聞く機会を設けることは、働くということについて考えをさらに深め、自分自身の将来設計をする上で、大変参考となった。

これらの体験学習を終えた後、17・18時間目に自分の将来の夢を書き表すという活動を設定した。様々な職業体験で学んだことを踏まえ、今の段階で思い描いている将来の夢や希望を、実際に書き表すことにより、今の自分やこれからの自分を見つめ直すことができるようになると考えたからである。夢の実現に向けて計画を立て、それについて、友だちから励ましやアドバイスをもらうことは、今までの学習をこれからの生活や学習に生かしてがんばろうという実践意欲を高めることにつながった。

図3-22は、将来の夢や希望を“未来樹”に書き表している様子である。



図3-22 希望や夢を書き表す様子

さらに、19・20時間目に、自分の将来設計を友だちと交流した。子どもたちは、友だちの夢を知ることにより、応援したくなったり、自分も同じようにがんばろうという気持ちが高まったりした。半年後には小学校を卒業し、中学校に進学するという節目を迎える子どもたちにとって、自分

を見つめ直し、なりたい自分の夢や希望を語り合うことは、大変よい機会となった。図3-23は、グループで、将来の夢や希望について思い描いていることを交流している様子である。



図3-23 夢や希望を語り合う様子

子どもたちが書いた作品は、後日、保護者の方にも見ていただき、子どもたちが立てた将来設計について、応援やアドバイスの言葉を“未来樹”に直接記入していただいた。家庭でも、子どもの夢や希望について語り合い、励ましてもらうことにより、子どもたちは、夢に向かって努力しようという気持ちがさらに強くなったと思われる。

ウ) 相談活動について

以前、「夢やあこがれをもっているか」という意識調査をしたときには、全員が「ある」と回答していたが、本時では、「なりたい仕事は自分に向いているのかなあ。」「本当に自分はそんな人になれるのかなあ。」と不安になり、“未来樹”に夢を書き表すことができない子が数名いた。

D児は5月の意識調査で、「人を楽しませたり驚かせたりする、お笑いの仕事につくのが将来の夢」と回答していた。今回の保育士体験でも、自分の持ち味を生かし、スーパーマンの衣装を着て、園児たちを楽しませていた。

しかし、本時では、「はっきりとした夢や将来像がわからない。」と“未来樹”を書くことをためらっていた。このD児に対し、次のような相談活動が行われた。

D児：お笑いも好きやけど、それを仕事にするのはちがうような気がする。

T：自分が好きなことを仕事としてできるといいですね。中には、自分の家の仕事を受け継ぐ人もいるし、得意ではない分野の仕事をしなければならないこともある。でも今は、夢を探し求める時期だから、仕事を探すのではなく、自分は何に興味があるのかを知り、どの方向に進もうか考えることの方が大切なのかもしれませんね。

D児：やってみたいと思っていることはある。
(以下、略)

この後、“未来樹”の将来の夢を記入するところは空欄のまま、D児は、今興味があることやチャレンジしてみたいことを指導者と一緒に探っ

いった。社会科の学習が好きであること、ザビエルの業績を学習して心が動いたこと、大人になったらスペインに実際に行って、ザビエルの親族に会ってみたいと思っていること、そのために大学に進学してスペイン語を学びたいことなど、指導者の聞き取りにより、D児のやりたいことが徐々に具体的になっていった。

最後にD児は、将来の夢を書く欄に、「専門家になるくらい、ザビエルのことについて詳しく知りたい。そして、ザビエルのような、社会のために貢献できる人になりたい。」と書き記した。友だちから、「(D児の夢は)意外だったけれど、ザビエルみたいに今の日本を変えてください。」と応援メッセージをもらい、とても嬉しそうだった。

エ) 評価活動について

第6学年でも、毎時間、振り返りカードを活用し、自己評価を次の学習の課題設定に生かした。図3-24は、総合的な学習の時間の振り返りカードの一例である。

～ 振り返りカード No. ～

ぼくら 生き方探検隊！

6年 組 ()

※ 学習のはじめに、自分のめあてを決めよう。(学習のめあてや前時の感想を参考にしよう)
※ 学習の終わりに、その時間の感想を記入しよう。

日	自分のめあて	感想 (反省点は次に生かそう)
/ ()	①仕事についてしっかり考える。	スチューデントシティ学習で学んだことを、そうじや係活動などで生かせてないなあと思った。
/ ()	②保育士さんの仕事について考える。	小さい子どもたちと遊ぶのは楽しそうだし、保育士体験をしてみたいなあと思った。
/ ()	③④保育士さんはどんなことに気をつけて仕事をされているのか、よく見る。	先生はとても忙しいのに、いつも笑顔だった。大切なことはダメだと注意することが大切。保育士さんたちは真剣に働いていることがわかった。
/ ()	⑤⑥「保育園と見学して、気がついたことをわかりやすくまとめて発表する。	年令がらうと、遊びの内容も変えなければいけないことがわかった。どうしたら園児たちが楽しんでくれるのかを考えなければいけないと思う。
/ ()	⑦園児の年齢や注意することを考えて、遊びの内容を決める。	絵本を選ぶのもけっこう大変だった。ゲームを決めるとき、話し合いに時間がかかった。次の時間は何をやるかということ、準備物もちゃんと考えたい。
/ ()	⑧みんなで協力して計画書を作る。	みんなと相談して、時間内に計画書が作れた。やっていくうちに、アイデアがいっぱい出てきて、いろんなものを作りたくなった。
/ ()	⑨⑩交流会なので、園児のことを考えてやさしく接する。	園児たちが楽しんでいたかわからないけど、自分のやることはちゃんとできたのでよかった。風船遊びは予想以上に盛り上がりがあった。
/ ()	⑪⑫交流会を振り返り、仕事について考える。	保育士さんの仕事は大変だと思った。でも、先生たちの話を聞いていて、夢に向かってやりたいことをするのはとてもいいなと思った。
/ ()	⑬⑭自分のいいところを見つめ直し、将来の夢について考える。	夢がなかなか見つからなかったけれど、自分の好きなことや興味のあることについて考えていくうちに、これかもと思う夢が見つかった。
/ ()	⑮⑯「ぼくら生き方探検隊！」で学んだことを振り返る。	友だちが、自分の夢がかなうようにがんばっていた言葉を書いたのがうれしかった。この勉強を通して、自分を見つめ直し、向き合うことができた。

図3-24 第6学年総合的な学習の時間

「振り返りカード」の一例

この振り返りカードからもうかがえるように、自己評価を重ねるごとに、前時の反省を生かした

自分のめあて作りができるようになってきている。また、活動ができたか、できなかったかという感想ではなく、この時間の学習で何を学んだのかということをも具体的に振り返ることができるようになってきた。

下に示したものは、単元の全学習を終えた子どもたちの感想の一部である。

- ・自分のことを、今までより深く知ることができた気がする。
- ・自分のことを知れば知るほど、自分の未来は無限大の可能性が広がっているんだなと思った。
- ・今まで、自分を見つめ直したり将来のことを考えたりしたことがなかったから、新しい夢が見つかってよかった。夢をもつことは、今をがんばることだとわかった。

また、単元の学習が終わった後、保護者の方からも、アドバイスや励ましの言葉を書いていただいた。下に示したものは、保護者からの言葉の一部である。

- ・これから、ただ勉強をし続けていくことはとても辛いし、楽しくないかもしれない。けれど、夢があれば、夢に近づくための勉強になって、きっと楽しくなる。あきらめずにがんばってくださいね。
- ・夢をかなえるために何が必要なのか、しっかり考えて、たくさんのことを学んでください。
- ・未来のことや、自分の周囲の人のことをいろいろ考えられるようになったのですね。夢へ向かって努力することを忘れないでね。
- ・お父さんもお母さんも、あなたのやりたいことやできることを全力で支えてやりたいと思っています。自分の夢が現実になれば、こんな楽しいことはないね。あなたの夢は、お父さんの夢でもあります。
- ・今の気持ちを大切に、世の中の様々なことに興味を持ち、また、目標に向かって一步一步前進してほしいと思います。頑張れ。
- ・誰にでもある子ども時代。今がすごく大切なことを、未来でも味わってください。

このように、家庭でも夢を語り合い、保護者からの助言や応援メッセージを受け取ることは、子どもたちの夢の実現への大きな励みにつながったに違いない。

(38)前掲(12) p.8

(39)京都市教育委員会『京都市立小学校教育課程 指導計画 生活科』2005.4 1・2-生-56

(40)前掲(39) 1・2-生-56～59

(41)ドリームツリープロジェクト『10歳からの夢をかなえるノート』学習研究社 2008.10

第4章 生き方探究教育の

さらなる充実を求めて

第1節 研究の成果と課題

(1) 各教科等における授業改善

前章では、「自己の夢をつくりあげる力（自己理解能力・将来設計能力）」を育てるために、日々の授業の中で、どのような工夫が具体的にできるのかについて述べてきた。成果として、次の3点が挙げられる。

1点目は、「夢や職業」「生き方」に視点をおいた教育活動の中で、「自己理解能力・将来設計能力」をはぐくむ8つの要素を意図的に組み入れた学習計画を立てることにより、子どもたちが、自己の在り方を見つめ、将来の夢や希望を抱くことができるようになったということである。

第6学年の実践では、「おもしろそうだから」「かっこいいから」といった曖昧な理由で将来像を描いていた子どもたちが、満足感・成就感を伴う様々な職業体験や大人とのかかわりによって、自分の特性を知り、より具体的な夢や希望を描くことができた。また、それを実現させるための将来設計をし、努力していこうという気持ちを高めることができたと思われる。

2点目は、他教科等との関連を意識した横断的な教育活動を展開することにより、子どもたちは、仕事に対する理解が深まり、働く大人の姿から、自分の生き方について考えることができるようになったということである。

第4学年の実践では、社会科で学んだ学習を生かして、道徳や特別活動で、働くとはどういうことか、自分はみんなのためにどのようなことができるのか、どのような大人になりたいのか、ということを考えることができた。様々な教科等の特性を生かし、多様な角度から、大人に対するあこがれを抱いたり、自分の将来像を思い描いたりすることができたと思われる。

3点目は、生き方探究教育でつきたい力を、具体的な支援として学習指導案や学習活動案上に明記したことにより、指導者が、「5領域17の力」をバランスよく学習活動と関連させ、それらの力を常に意識して、教育活動を展開することができるようになったということである。

第2学年の実践では、町探検という学習活動において、『共生』の観点である「共に生きる力」と、『自立』の観点である「計画を企画し実行する力」

の両方をつけたいと考え、学習活動案上に育てたい力を明記した。このことにより、指導者は、どの学習活動でどのような力を意識すればよいのかわかり、子どもたちにも生き方探究教育のねらいを明確に伝えることができたと思われる。

各教科等の授業改善において、これらの成果があったが、課題も見えてきた。生き方探究教育を進める上で必要となる年間指導計画を、その年度のできるだけ早い時期に作成し、見直しをもった指導をするということである。

前にも述べたが、生き方探究教育は、各教科等の枠を超えた、全教育活動の中で進められるものである。そこで、各教科等と同様に、年間を見通した、生き方探究教育にかかわる指導計画を立てる必要がある。各教科等の関連を考えた横断的な指導計画を立てるには、〈概要編〉にある、「共生と自立を柱とする5つの領域と17の力の学習プログラム枠組み(例)」(42)や、「地域・社会との関わりの中で生き方を考え、生きる力をはぐくむ生き方探究教育」(43)、「生き方を考え、生きる力を育む『生き方探究教育』に関する教科・領域活動例」(44)などを活用し、子どもの実態に応じた指導計画を年度当初に作成して、それに基づいた教育活動を展開することが、今後の課題となってくると思われる。

(2) 全教育活動での個に対する働きかけ

前章では、個に応じた指導や援助である相談活動と、振り返りカードによる評価活動が、実践授業の中でどのように行われたのかについても述べてきた。

相談活動の成果として、次の2点が挙げられる。

1点目は、子どもたちが、ものごとや自分の在り方を肯定的にとらえたり、よりよい選択・決定をしたりすることができるようになったということである。

意志決定の場面で、なかなか自分の考えを決めることができなかつた子どもや、発表の場面で、自分の思いに自信がもてず、うまく表現できなかった子ども、将来設計を立てる場面で、明確な理由や自分の特性を考えず、将来像がはっきりしなかつた子どもに対し、その子に応じた言葉かけや聞き取りを行った。そのことにより、「自分はだめなんだ。」「うまくいくわけがない。」と否定的なものごとをとらえていた子どもたちの気持ちが、「自分はできるかもしれない。」「がんばって挑戦してみよう。」という前向きな気持ちに変容した。

このことは、子どもの自己理解能力を高めることにもつながった。指導者と、自分の特性や置かれている状況、思いや考え方に迫る個別の指導や支援をすることにより、子どもは、肯定的なものごとを考え、安心感の中で自分の可能性や能力をより深く知ることができたと思われる。

2点目は、指導者が、子ども一人一人のキャリア発達を詳細に把握することができるようになったということである。

意図的に、その子に応じた対話をするにより、指導者もまた、今の時点でその子がどのような思いや考えをもっているのかということを直接的に理解することができた。子どもの家での様子や家庭環境など、生活背景にかかわる対話をすることで、その子に対する理解はさらに深まり、本人の自己理解も進むと思われる。

また、評価活動の成果として、次の2点が挙げられる。

1点目は、毎時間、学習活動を振り返る時間を設け、カードに記入して残していくことにより、子どもの自己評価能力が高まっていったということである。

前章で掲載した振り返りカードからもうかがえるように、単元の学習が進むにつれ、学習活動に対する自己評価が具体的になり、次の時間にめあてとするべき課題を明確にもつことができるようになったと思われる。

2点目は、前時の自己評価を基に、学習に対する具体的な自分のめあてを立てることができるようになったということである。

1時間の学習の振り返りを、「これができた。」「あれができなかった。」という結果だけで終わらせるのではなく、次時の学習やこれからの生活を考える上でどう生かすかといった、将来を見据えた評価活動ができるようになったと思われる。このことは、次に自分は何をしなればいけないのかということを考えるといった、将来設計能力をはぐくむことにつながった。

これらの個に対する働きかけはすべて、子ども一人一人のキャリア発達を支援し、学ぶことへの関心や意欲を高める効果があった。「やりたいことが見つからない。」「夢がもてない。」と考えていた子どもたちは、指導者との相談活動により、「自分はこんなことができそうだ。」「夢の実現のために今やるべきことをし、さらに、新しいことにも挑戦してみよう。」という姿に変わっていった。さらに、仕事と学ぶこととのつながりを意識させること

ができた。また、与えられた課題や人から言われたことをただこなしていた子どもたちは、毎時間、自己評価を積み重ね、次時の自分のめあてを設定することで、自ら進んで学習に取り組むことができるようになった。

以上のことから、指導者が、計画的・系統的な、より質の高い相談活動を進めることが今後の課題となってくると思われる。そのためには、あらゆる教育活動の場で子ども理解に努めることや、全教職員や保護者と連携をとり、多方面からの子どもに関する情報収集や情報交換が大切になってくる。さらに、どのような相談活動を行えば子どもたちのキャリア発達を適切に支援することができるのかということを、全教職員で研修する機会を設けることも必要だと思われる。

また、単元や各教科等の枠にとらわれず、「自分の在り方や生き方を考える」という目的をもったポートフォリオを作成することが、よりよい自己実現をめざす上で、大変効果があると考えられる。子ども自身が学びを振り返ったり、指導者がキャリア発達を支援したりする観点から、個別指導に役立つ資料の蓄積や活用が、今後の課題だと思われる。自分の成長や気持ちの変容を確かめる場の設定や、保護者や地域の方から感想や励ましの言葉をもらおうといった評価活動の工夫も、さらに考えていかなければならない。

第2節 今後の取組に向けて

(1) 発達段階に応じた系統的な取組

本研究では、生き方探究教育において子どもにつけたい力である、「5領域17の力」の中の「自己の夢をつくりあげる力（自己理解能力・将来設計能力）」に焦点を当て、第2学年・第4学年・第6学年の実践授業を通して検討した上で、具体的な指導の在り方を提示してきた。様々な教育活動を進める中で、子どもに直接的に働きかける具体的な方法を提示し、実践することは、学習前と学習後での子どもの「学ぶ意欲」の変容において、大きな成果があった。

しかし、生き方探究教育をさらに充実させるためには、1単位時間、あるいは単元の学習活動に手だてや工夫を加えるという取組だけでは十分だとは言いがたい。単元と単元、教科と教科の関連や、隣接学年の学習内容とのつながりを考慮し、小学校6年間で、子どもたちにどのような力をつけたいかということを見通した、系統的な取組を進めて

いかなければならない。

そこで、次のような指導の構想をもち、各学校が、子どもの発達段階や実態に応じた生き方探究教育を推進していくことが必要だと考える。

〔生き方探究教育の指導の構想〕

1. 生き方探究教育の全体計画を立案
2. キャリア発達課題の設定
3. 生き方探究教育の年間指導計画を作成

まず、生き方探究教育の全体計画を立案することである。これは、学校教育目標の実現に向けて、学校教育推進上の生き方探究教育の位置づけを示したものである。組織的・計画的な生き方探究教育を展開するために、全体計画の中には、学校教育目標とともに、生き方探究教育にかかわる重点目標（育てたい力）、各学年の目標、各教科等における指導内容などを明示することが考えられる。

〈概要編〉にある、「全体計画作成例（小学校例）」⁽⁴⁵⁾などを参考に、勤労観・職業観の育成や、生き方を考え、生きる力をはぐくむことに重点を置いた基本方針を設定することが大切である。

次に、子どもの発達段階や実態を考慮し、各校独自のキャリア発達課題を設定していくことである。子どもの生活や意識、あるいは家庭、地域の実態などから、自校の子どもたちのキャリア発達をうながす上で、何が課題か、どのような資質や能力・態度の育成に重点を置くべきかなどを検討することが必要となってくる。設定したキャリア発達上の課題は、具体的な目標となり、子どもにつけたい能力や態度が明確になるからである。

その後、生き方探究教育における年間指導計画を作成することが必要である。各教科等の教育活動を体系化し、焦点を絞りながら、計画的に実施できるような指導計画を立案することが必要である。その際、学校行事や集団宿泊活動、職場体験や奉仕体験などの発達段階に応じた体験活動を適切に組み込み、創意工夫ある教育活動を展開できるようにしていくことが大切である。

以上のような系統的な取組を進めるためには、全教職員が生き方探究教育の趣旨を十分理解し、それぞれの役割を適切に果たしていけるような体制作りが大切になってくる。「生き方探究教育推進委員会」などの校内組織を設置することにより、効果的な取組ができるようになると思われる。

また、年度末には、これらの実践についての評価を行い、成果と課題を明らかにして、次年度の取組に生かすようにすることが必要だと考える。

(2) 滑らかな接続をめざした各校種間の連携

前述したように、生き方探究教育とは、よりよい自己実現をめざし、自らの生き方を確立していく教育である。そこで、できるだけ早い時期から、子どもたち一人一人のキャリア発達を支援し、子ども自身が「夢や職業」「生き方」について考える機会を多くもつことが大切であると考え、小学校段階での生き方探究教育の在り方について研究を進めてきた。

学校から社会への円滑な移行ということを考えると、今後は、小・中学校を一貫して、生き方を考え、生きる力をはぐくむ生き方探究教育の在り方を考えていく必要があると思われる。各校種ごとの計画・実践では、子どものよりよいキャリア発達を十分に見取ることが望めないからである。三村も、キャリア教育の推進について、「各校種で単発的に実践されるのではなく、目標を絞り込んだ共通の観点から必要な能力を育成していくことが望まれている」(46)と述べている。

義務教育を終える時期の子どもたちに、どのような力をつけるべきなのかということを見据え、小・中学校9年間を一貫した、系統的な学習計画を立てることが必要となってくる。

そのためには、同じ中学校区に属する小・中学校が連携し、9年間の子どものキャリア発達課題を明らかにした計画・実践を進めることが必要である。現在の中学校における進路指導の実態を踏まえ、小学校における生き方探究教育での学びがどのように中学校へつながるのかを明確にして、小中連続した教育活動となるように、指導の構想を練ることが大切である。

小・中学校が連携を深め、意図的・計画的に情報交換したり、教職員の人事交流も含め、校種を超えて児童生徒が交流したりする中で、生き方探究教育を進める工夫も必要である。このことが、子どもの滑らかなキャリア発達につながると思われるからである。中でも、小学校と中学校の接続期である6年生という時期は、小学校卒業という大きな節目を迎えると同時に、児童期と思春期が混在し、中学校生活への期待や不安が交錯する時期でもある。夢の実現のステップとして中学校進学をとらえ、希望をもって中学校生活を送れるように働きかけていきたいものである。

また、9年間の義務教育におけるよりよいキャリア発達をめざして、小学校における個々の学びと成長のあしあとを、中学校にもつなげるように工夫することが必要だと考える。

例えば、キャリア発達の履歴となるポートフォリオを作成し、学年や校種の枠を超えてつないでいく。ポートフォリオを次の学年でも活用することにより、連続的に子どもの成長を見取ることが可能となる。また、子どもも指導者も、一人一人のキャリア発達を明確に把握できる、具体的で詳細な資料となる。子どもは、以前の自分と今の自分を比較することで、より一層、自らの成長を確信していくことができる。また、指導者は、その子がどのような学びを積み重ね、どのような力をつけたのかといった、子ども理解が深まる。

さらに、子どもの発達段階に応じた、系統性のある体験活動を充実させることが必要だと考える。本市では、小学校でのスチューデントシティ学習や中学校でのファイナンスパーク学習、チャレンジ体験などの体験学習が各校種で定着しつつある。小・中学校を通して、このような社会とつながる体験活動を積み重ねれば、学年が進むにつれて、社会貢献への意欲や勤労観・職業観がさらに高まっていくと思われる。どの学年の子どもに、どの体験活動で、どのような力をつけたいのかということを確認し、系統性のある体験活動を構築していくことが大切である。

今後は、小・中学校が連携を深め、子どもに、9年間の自らの変容や成長を実感させることができるような教育活動を展開することが望まれる。

(42) 前掲(12) pp. 9~10

(43) 前掲(12) pp. 19~20

(44) 前掲(12) p. 53

(45) 前掲(12) p. 52

(46) 前掲(23) p. 182

おわりに

自分のあるがままの姿を見つめ、多くの人や社会とのかかわりの中で小さな成功体験を重ねるたびに自分に自信をもち、将来の自分の姿をイメージしながら、前向きにたくましく生き抜いていく。このような子どもを育てる生き方探究教育は、授業改善の視点となり、学力保障につながった。生き方探究教育のさらなる充実が、子どもたち一人一人の未来を明るくものにすると信じている。

最後に、本研究の趣旨を理解し、熱心に実践授業に取り組んでいただいた研究協力員の先生方をはじめ、研究協力校の教職員の皆様方に、心より感謝の意を表すとともに、「夢や職業」「生き方」について意欲的に学んでくれた子どもたちの未来にエールを送りたい。

【付表1】

第1学年 生き方探究教育 各教科、道徳、特別活動と「自己の夢をつくりあげる力」との関連表(例)

○…単元の目標、学習のねらい ☆…「自己理解能力」にかかわるキャリア発達課題 ★…「将来設計能力」にかかわるキャリア発達課題

月	自己理解能力	将来設計能力	月
4	<p>☆素直に伸び伸びと生活する ☆よいと思うことを進んでする ☆自分にできることを見つける ☆いろいろな役割があることがわかる</p> <p>〈図工〉「好きなものなあに」② ○好きなもの、買ったもの、あったらいいなと買ったものを、おもいのままに絵にかくようにする。</p> <p>☆自分の好きなことや好きなものを表現する。</p>	<p>☆準備や片づけをする ☆自分から進んで学習する ☆約束や時間を守る</p> <p>〈道徳〉「キリンさん ごめんね」4-(1) ○それぞれの場所における約束やきまりを知り、守ろうとする心情を育てる。</p> <p>★約束やきまりを守る。</p>	4
5	<p>☆自分にできることを考える。</p> <p>〈特別活動〉(学級活動) 「自分のことは自分」</p>	<p>〈道徳〉「うれしかったこと」1-(3) ○よいと思うことは進んで行おうとする心情を育てる。</p> <p>☆よいと思うことを進んでする。</p>	5
6	<p>☆自分にできることを考える。</p> <p>〈道徳〉「げんきだして！」1-(2) ○自分がやらなければならないことは、しっかりと行おうとする態度を養う。</p> <p>☆自分のできることを考える。</p>	<p>〈特別活動〉(学級活動) 「なつやすみのくらし」</p> <p>☆☆基本的な生活習慣を身につける。 ☆家庭でのいろいろな役割があることがわかり、自分のできることを考える。 ★約束や時間を守る。</p>	6
7			7
8・9	<p>〈生活〉「みんなだいすき」⑫ ○家庭生活に関心をもち、自分の役割を積極的に果たそうとする。</p> <p>○自分でできること、役割が増えたことなどに気付く。</p> <p>☆いろいろな役割があることがわかり、自分のできることを考える。</p>	<p>〈道徳〉「できるかな」1-(1) ○自分の持ち物やみんなで使う物を整理整頓しようとする態度を養う。</p> <p>★準備や後片づけをする。</p>	8・9
10	<p>☆素直に伸び伸びと生活する。</p> <p>〈道徳〉「お月さまとコロ」1-(4) ○いつも明るい気持ちをもち、素直に伸び伸びと生活しようとする態度を養う。</p>		10
11	<p>☆素直に伸び伸びと生活する。</p> <p>〈道徳〉「くつあらい」4-(2) ○家族の一員として、進んで手伝いをし、家族の役に立てる喜びの気持ちを持つ。</p> <p>☆いろいろな役割があることがわかり、自分のできることを考える。</p>	<p>〈道徳〉「みんなのりのり」4-(1) ○使う人の気持ちを考え、約束やきまりを守ろうとする態度を養う。</p> <p>★約束やきまりを守る。</p>	11
12	<p>☆よいと思うことを進んでする。</p> <p>〈道徳〉「いばりんぼ」1-(3) ○よいと思うことは、進んで行おうとする態度を養う。</p> <p>☆よいと思うことを進んでする。</p>	<p>〈特別活動〉(学級活動)「ふゆやすみのくらし」</p> <p>☆☆基本的な生活習慣を身につける。 ☆いろいろな役割があることがわかり、自分のできることを考える。 ★約束やきまりを守る。</p>	12
1	<p>☆よいと思うことを進んでする。</p> <p>〈道徳〉「おふろばそうじ」1-(2) ○自分でやらなければならない勉強や仕事をしっかりと行おうとする態度を養う。</p> <p>☆自分のできることを考える。</p>	<p>〈生活〉「もうすぐ2ねんせい」⑨ ○1年間の自分の成長や、その成長には、多くの人々の支えがあったことに気付くとともに、成長することの大切さに気付く。 ☆☆1年間の成長を振り返り、自分のめあてをもつ。</p>	1
2	<p>☆思い出を振り返り、心に残ったことを表現する。</p> <p>〈図工〉「ウキウキドキドキ」⑥ ○楽しかったこと、驚いたこと、興奮したことを思い出して絵に表すようにする。</p>	<p>〈国語〉「もうすぐ2ねんせい」③ ○数量について関心をもち、活動に取り組み、数理的な処理のよさに気付く。進んで生活に生かそうとする態度を育てる。</p> <p>★自分から進んで学習し、わかったことを生活に生かす。</p>	2
3	<p>☆思い出を振り返り、心に残ったことを表現する。</p>	<p>☆☆1年間の成長を振り返り、自分のめあてをもつ。</p>	3

【付表2】

第2学年 生き方探究教育 各教科、道徳、特別活動と「自己の夢をつくりあげる力」との関連表(例)

○…単元目標、学習のねらい ☆…「自己理解能力」にかかわるキャリア発達課題 ★…「将来設計能力」にかかわるキャリア発達課題

月	自己理解能力 ☆素直に伸び伸びと生活する ☆よいと思ふことを進んでする ☆自分にできることを見つける ☆いろいろな役割があることがわかる	将来設計能力 ☆準備や片づけをする ☆自分から進んで学習する ☆約束や時間を守る	月
4	<p>〈道徳〉「赤いボール」1-(3) ○よいと思ふことをはっきりと主張し、進んで行おうとする態度を養う。 ☆よいと思ふことを進んでする。</p>	<p>〈算数〉「1日の生活」⑦ ○1日の生活時間に関心をもち、日常生活の中で進んで時刻を活用しようとする態度を育てる。 ★決められた時間や約束を守ろうとする。</p>	4
5			5
6	<p>〈道徳〉「赤いボール」1-(3) ○よいと思ふことをはっきりと主張し、進んで行おうとする態度を養う。 ☆よいと思ふことを進んでする。</p>	<p>〈特別活動〉(学級活動) 「なつやすみのくらし」 ☆基本的な生活習慣を身につける。 ☆家庭でのいろいろな役割があることがわかり、自分のできることを考える。 ★約束や時間を守る。</p>	6
7			7
8・9	<p>〈道徳〉「あきささんなのつやつやすみ」4-(2) ○進んで家族の役に立つことをしようとする心構えを育てる。 ☆いろいろな役割があることがわかり、自分のできることを考える。</p>	<p>〈国語〉「あつたらいいな、こんなもの」⑮ ○話す順序を考えながら、相手に分かるように話したり、また相手と考えた名前やできることを落とさないように聞いたり、意見を出し合ったりできるようにする。 ★学習に必要なものを準備する。</p>	8・9
10	<p>〈道徳〉「さやかさんのおにぎりづくり」4-(2) ○進んで家の手伝いをしようとする心構えを育てる。 ☆いろいろな役割があることがわかり、自分のできることを考える。</p>	<p>〈道徳〉「どうして生きてるってわかるの？」3-(2) ○いのちのかがやきを身につけることを通して、生きること喜び、生命を大切にすることを育てる。 ★今生きていることを喜び、自分も大切にすることを目指す。</p>	10
11	<p>〈生活〉「みんなであつたらフエスティバル」⑭ ○楽しいフエスティバルにするため、今まで体験してきたさまざまな力を応用し、友達と協力しながら工夫してフエスティバルを作り上げることが出来る。 ☆いろいろな役割があることがわかり、自分のできることを考える。</p>	<p>〈道徳〉「マロンたいかい」1-(2) ○自分でやろうと決めたことは工夫し、学びながら最後までやり通そうとする心構えを育てる。 ★今やるべきことと自分でやると決めたことをする。</p>	11
12	<p>〈国語〉「楽しかったよ、二年生」⑬ ○読む人に楽しさが伝わるように、出来事を詳しく思い出し、簡単な組み立てを考えて文章を書くことが出来るようにする。 ☆1年間を振り返り、心に残ったことを表現する。</p>	<p>〈特別活動〉(学級活動…1単位時間外) ☆基本的な生活習慣を身につける。 ☆いろいろな役割があることがわかり、自分のできることを考える。 ★約束やきまりを守る。</p>	12
1		<p>〈生活〉「あしたベージャン」(27) ○自分の成長とともに役割が増えてきたことなどがわかり、これまで成長には多くの人々の支えがあったことに気付く。 ★自分の成長を振り返り、これからのためあてをもつ。</p>	1
2	<p>〈道徳〉「わたしのランドセル」1-(3) ○よいと思ふことを進んでする。 ☆よいと思ふことを進んでする。</p>	<p>〈道徳〉「げんき出して！」1-(2) ○自分がやらなければならないことは、しっかりと行おうとする態度を養う。 ★今やるべきことと自分でやると決めたことをする。</p>	2
3		<p>〈算数〉「もうすぐ3年生」⑥ ○数量や図形について見通しをもち、筋道を立てて考えられるようにする。 ★自分から進んで学習し、わかったことを生活に生かす。</p>	3

【付表3】

第3学年 生き方探究教育 各教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間と「自己の夢をつくりあげる力」との関連表(例)

○…単元の目標、学習のねらい ☆…「自己理解能力」にかかわるキャリア発達課題 ★…「将来設計能力」にかかわるキャリア発達課題

月	自己理解能力 ☆自分のよいところを見つける ☆自分のことは自分でやる ☆お互いの役割や分担の必要性がわかる	特別活動(学級活動) 「学校の約束・当番の仕事」 ☆お互いの役割や分担の必要性がわかる。 ★進んできまりや規則を守る。	将来設計能力 ★計画を立てる。こと、希望について考える	月
4			<p>〈国語〉「つづけてみよう」② ○日記について興味をもち、計画を立てることができるようになる。 ★計画的を立て、日記を書くことを続ける。</p>	4
5	<p>〈道徳〉「『できることさがし』ゲーム」1-(1) ○自分ですべきことは人に頼らないで、自分の力でやろうとする心情を育てる。 ☆自分のことは自分でやる。</p>		<p>〈国語〉「つづつきの荷売」④ ○さまざまな国語学習に興味をもち、学習計画を立てることができるようになる。 ★学習計画を立てることの必要性がわかる。</p>	5
6	<p>〈道徳〉「小さなきょうし」4-(2) ○力を合わせて働くことの大切さを知り、みんなのために進んで働くようとする心情を育てる。 ☆お互いの役割や分担の必要性がわかる。</p>	<p>〈特別活動〉(学級活動) 「夏休みのくらし」 ☆家庭での仕事の分担の必要性がわかり、できることを実行する。 ★進んできまりや規則を守る。 ★規則正しい生活を心がける。</p>	<p>〈道徳〉「雨のバスでいっしょ」4-(1) ○きまりや規則が必要なわけを知り、進んできまりや規則を守ろうとする態度を育てる。 ★進んできまりや規則を守る。</p>	6
7			<p>〈理科〉「いっしょけんせつ」③ ○これまで学習してきたことを基にして、自主的に研究したいテーマを考え、研究方法やまとめ方を計画し、調べたり作りたりすることができるようになる。 ★計画を立てて、自由研究を進める。</p>	7
8・9			<p>〈道徳〉「明かりが昇えた」3-(2) ○生きることの大切さを知り、生命を大切に生きて生きたい心情を育てる。 ★将来の夢や希望をもつ。</p>	8・9
10	<p>〈道徳〉「つぎつぎと」1-(5) ○明るい心で元氣よく生活しようとする態度を養う。 ☆自分のよいところを見つめる。</p>			10
11		<p>〈道徳〉「生きていくしるし」3-(2) ○自分の生育を振り返ることから生命の尊さを知り、生命あるものを大切にしようとする心情を育てる。 ★自分の成長を振り返り、将来の夢や希望をもつ。</p>	<p>〈特別活動〉(学級活動)…1単位時間外 ☆ゆやすみのくらし り、できることを実行する。 ★進んできまりや規則を守る。 ★規則正しい生活を心がける。</p>	11
12				12
1	<p>〈体育・保健〉「毎日の生活と健康」④ ○家庭や学校における毎日の生活に興味をもち、健康によい生活を送ることができるようになる。 ☆自分の生活を見直し、改善の方法を考える。</p>		<p>〈図工〉「みんななでつづろう！ゆめの町」⑥ ○どんな町に住みたいか、みんなで作る。計画を立ててなからつづくるようにする。 ★学習計画を立てることの必要性がわかる。</p>	1
2		<p>〈国語〉「モチモチの木」⑨ ○自分で課題を設定して学習方法を工夫し、自ら学び考えようとする心情を育てる。 ★自分で学習課題を設定し、計画を立てて学習を進める。</p>	<p>〈算数〉「もうすぐ4年生」③ ○数量や図形について、異通しをもち筋道を立てて考えられるようになる。 ★異通しをもち、筋道を立てて課題解決ができる。</p>	2
3	<p>〈道徳〉「お母さんのせいせきゆう書」4-(3) ○親の深い愛に感謝し、家族の一員として尽くそうとする心情を育てる。 ☆お互いの役割や分担の必要性がわかる。</p>		<p>〈特別活動〉(学級活動)…1単位時間外 ☆ゆやすみのくらし ☆家庭での仕事の分担の必要性がわかり、できることを実行する。 ★進んできまりや規則を守る。 ★規則正しい生活を心がける。</p>	3

【付表4】

第4学年 生き方探究教育 各教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間と「自己の夢をつくりあげられる力」との関連表(例)

○…単元目標、学習のねらい ☆…「自己理解能力」にかかわるキャリア発達課題 ★…「将来設計能力」にかかわるキャリア発達課題

月	自己理解能力 ☆自分のよいところを見つける ☆お互いの役割や分担の必要性がわかる	将来設計能力 ☆計画を立てることの必要性がわかる ☆将来の夢や希望について考える	月
4	<p>〈道徳〉「目ざまし晴計」1-(1) ○自分でできることは自分でやり、節度ある生活をしようにする態度を養う。 ☆自分のことは自分でやる。</p>	<p>〈特別活動〉(学級活動) 「学校の約束・当番の仕事」 ☆お互いの役割や分担の必要性がわかる。 ☆進んできまみや規則を守る。</p>	4
5	<p>〈道徳〉「よいことあるやんかゲーム」1-(5) ○自分のよい所を知り、明るい心で元氣よく生活しようとする心情を育てる。 ☆自分のよいところを見つける。</p>	<p>〈道徳〉「つばめと小鳥」4-(1) ○人からの忠告を素直に聞き、約束や社会のきまりを守ろうとする心情を育てる。 ☆進んできまみや規則を守る。</p>	5
6	<p>〈道徳〉「おたましやくしの世話」4-(2) ○力を合わせて仕事をすることの大切さを理解し、進んで働くようとする態度を養う。 ☆お互いの役割や分担の必要性がわかる。</p>	<p>〈特別活動〉(学級活動) 「夏休みのくらし」 ☆家庭での仕事の分担の必要性がわかり、できることを実行する。 ☆進んできまみや規則を守る。 ☆規則正しい生活を心がける。</p>	6
7	<p>〈国語〉「ほく」② ○「ほく」という詩を、「ほく」の字組が意味することや考えを、声に出して読むことができるようにする。 ☆自分について考えることの楽しさを知る。</p>	<p>〈理科〉「自由研究」③ ○これまで学習してきたことをもとにして、自主的に研究したいテーマを考え、研究方法やまどめ方を計画し、調べたり作りたりすることができるようにする。 ☆計画を立てて、自由研究を進める。</p>	7
8・9	<p>〈道徳〉「なしの実」1-(5) ○明るい心で元氣よく生活しようとする心情を育てる。 ☆自分のよいところを見つける。</p>	<p>〈道徳〉「お誕生日はどのようにおめでとうなの」3-(2) ○生命を大切にし、前向きに生きようとする心情を育てる。 ☆自分の成長を振り返り、将来の夢や希望をもつ。</p>	8・9
10			10
11	<p>〈体育・保健〉「育ちゆく体とわたし」④ ○体の発育・発達に關心をもち、身近な生活において健康で安全な生活を送ることができるようになる。 ☆自分の生活を見直し、改善の方法を考える。</p>	<p>〈特別活動〉(学級活動) 「十才を輝かせ」 ☆自分の成長を振り返り、将来の夢や希望について考える。</p>	11
12			12
1	<p>〈道徳〉「神戸のふっこうは、ぼくらの手で」4-(2) ○力を合わせて仕事をすることの大切さを理解し、みんなのために進んで働くようとする態度を養う。 ☆お互いの役割や分担の必要性がわかる。</p>	<p>〈社会〉「地域の発展につくした人」⑧ ○地域の発展に尽くした先人に關心をもち、先人の働きや工夫、努力について考えるようにする。 ☆先人に対するあこがれをもち、自分の夢や将来について考える。</p>	1
2	<p>〈国語〉「ほくまさん・わたしとほくまさん」② ○自分のよさを身につけ、読み手に伝わるように、中心を明確にして書くことができるようになる。 ☆自分のよいところを見つける。</p>	<p>〈道徳〉「もどらない木」1-(2) ○自分でやるべきことを責任をもって行動しようとする態度を養う。 ☆今やるべきことを整理して取り組む。</p>	2
3		<p>〈国語〉「ごんぎつね」(21) ○「ごんぎつね」を読み、自分で課題を設定して学習方法を工夫し、計画を立てて取り組むことができるようになる。 ☆自分で学習課題を設定し、計画を立てて学習を進める。</p>	3

【付表5】

第5学年 生き方探究教育 各教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間と「自己の夢をつくりあげる力」との関連表(例)

○…単元目標、学習のねらい ☆…「自己理解能力」にかかわるキャリア発達課題 ★…「将来設計能力」にかかわるキャリア発達課題

月	自己理解能力	将来設計能力	キャリア発達課題
4	<p>〈道徳〉「明の長所」1-(6)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○自分の長所を伸ばしていきたいようにしようとすること ☆自分のよさを伸ばすために努力する。 	<p>〈総合的な学習の時間〉「キャリアデザイン学習」⑩</p> <ul style="list-style-type: none"> ○日常生活に関わる経済の動きや社会との関わりを理解させる。 ○望ましい勤労観、職業観を育て、自らの生き方を考える力を培う。 ☆進んで役割を受け持ち、責任をもって果たそうとする。 ★働くことや学ぶことの意義がわかる。 	<p>〈特別活動〉(児童会活動)「委員会の所属」</p> <ul style="list-style-type: none"> ★働くことや学ぶことの意義を考える。
5	<p>〈家庭〉「肩つめよう！ 家庭生活」⑧</p> <ul style="list-style-type: none"> ○家庭生活への関心を高め、家庭の中で自分ができる仕事はないかを考えて、取り組むようにする。 ☆進んで役割を受け持ち、責任をもって果たそうとする。 	<p>〈図工〉「こんなとき感じることを思うこと」⑥</p> <ul style="list-style-type: none"> ○自分の生活を振り返って、夢中になつたことや、一番好きなこと、よく伝わるように場面を選び、画面構成を工夫するようになる。 ☆生活を振り返り、自分の特徴を知る。 	
6	<p>〈道徳〉「お母さんの病氣」4-(5)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○家族の立場を理解し、家族の幸せを求めて進んで役に立つようとする態度を養う。 ☆進んで役割を受け持ち、責任をもって果たそうとする。 	<p>〈特別活動〉(学級活動)「夏休みの生活」</p> <ul style="list-style-type: none"> ☆進んで役割を受け持ち、責任をもって果たそうとする。 ★働くことや学ぶことの意義がわかる。 ★規則正しい生活を心がける。 	
7	<p>〈国語〉「人と物の止のつきあい方」⑮</p> <ul style="list-style-type: none"> ○自分の課題について調べたことを発表した時、おだちの発表を聞いてとりこぼしを認め、今の自分の生活を見つめ直し、文章にまとめることができるようにする。 ☆自分の生活をみつめ直し、改善の方策を考え、努力する。 	<p>〈理科〉「自由研究」③</p> <ul style="list-style-type: none"> ○これまで学習してきたことをもとにして、自主的に研究したいテーマを考え、研究方法やまとめ方を計画し、調べるができるようにする。 ★見通しをもって、設定した課題を追究する。 	
8・9	<p>〈国語〉「流行おくれ」1-(1)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○自分の生活を振り返り、節度を守り、節制に心がけようとする態度を養う。 ☆自分の長所や短所に気づく。 		<p>〈特別活動〉(学校行事)「野外教育活動」</p> <ul style="list-style-type: none"> ★先を見通し、的確に行動する。 ☆進んで役割をつとめ持ち、責任をもって果たそうとする。 ★働くことや学ぶことの意義を考える。
10	<p>〈道徳〉「森の終」4-(1)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○身近な集団に進んで参加し、自分の役割を自覚し、主体的に協力して責任をもって果たそうとする。 ☆進んで役割を受け持ち、責任をもって果たそうとする。 		
11	<p>〈道徳〉「京都市から21世紀へのメッセージ」4-(1)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○身近な集団に進んで参加し、自分の役割を自覚し、主体的に協力して責任をもって果たそうとする。 ☆進んで役割を受け持ち、責任をもって果たそうとする。 	<p>〈道徳〉「大達しいさんどファン」⑮</p> <ul style="list-style-type: none"> ○教材文を読み、自分で課題を設定して学習方法を工夫し、計画を立てて取り組むことで、自ら学び自ら考える力を身に付けることができるようにする。 ★自分で学習課題を設定し、計画を立て、方法を工夫して学習を進める。 	
12	<p>〈道徳〉「母の仕事」4-(4)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○進んで人のためになる仕事をしようとする態度を養う。 ☆進んで役割を受け持ち、責任をもって果たそうとする。 	<p>〈国語〉「もうすぐ6年生」⑦</p> <ul style="list-style-type: none"> ○算数や図形について見通しをもち、筋道を立てて考えられるようにする。 ★見通しをもち、筋道を立てて、課題解決ができる。 	
1	<p>〈体育・保健〉「心の健康」④</p> <ul style="list-style-type: none"> ○心はいろいろな生活経験を通して、年齢とともに発達することを知ることできるようにする。 ☆自分の特徴がわかる。 	<p>〈家庭〉「くふうしよう！ かしこい生活」⑮</p> <ul style="list-style-type: none"> ○身の回りの整理・整頓や掃除ができる。また、計画的な物の使い方や買い方ができる。 ★先を見通し、的確に行動する。 	<p>〈特別活動〉(クラブ活動)「クラブの所属」</p> <ul style="list-style-type: none"> ★やってみたいクラブ活動について、考える。
2	<p>〈道徳〉「ひるがえる校章」4-(6)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○学校の一員としての役割を自覚し、進んでよい校風を作ろうとする態度を養う。 ☆進んで役割を受け持ち、責任をもって果たそうとする。 	<p>〈特別活動〉(学級活動)「1単位時間外」</p> <ul style="list-style-type: none"> ☆進んで役割を受け持ち、責任をもって果たそうとする。 ★働くことや学ぶことの意義がわかる。 ★規則正しい生活を心がける。 	
3	<p>〈道徳〉「心と体の健康」④</p> <ul style="list-style-type: none"> ○心はいろいろな生活経験を通して、年齢とともに発達することを知ることできるようにする。 ☆自分の特徴がわかる。 		

